

2023 年 7 月

食料安全保障月報

(第 25 号)



令和 5 年 7 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年 6 月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月 1 回、月末を目処に公表します。

2023 年 7 月食料安全保障月報（第 25 号）

目 次

概要編

I	2023 年 7 月の主な動き	1
II	2023 年 7 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「米国の生育状況と貿易動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

「シンガポールの食料事情③：シンガポール人の日本食評価」

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は前月予測から上方修正され 47.3 百万トン
	＜カナダ＞	2023/24 年度の生産量は前年度に比べ 4.5%増の 35.3 百万トン
	＜豪州＞	2023/24 年度の生産量は前年度比 26.9%減の 29.0 百万トン
	＜EU27＞	東欧 5 か国：ウクライナ産小麦の輸入規制の延長を検討
	＜中国＞	2023/24 年度の消費量は、飼料用の増加から 2.0 百万トン上方修正
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 47.5 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の輸出量は 10.5 百万トンと前年度比 37.5%減少
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	作付面積の増加により、生産量は 1.4 百万トン上方修正
	＜ブラジル＞	2022/23 年度の冬とうもろこしの収穫に遅れ
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 40.6%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2023/24 年度の収穫面積は前年度より 21.6%増
	＜インド＞	2023 年 7 月 20 日よりバスマティ米以外の輸出を禁止

- <中国> 一期作稲、及び南部の二期作早稲の生育は順調
- <タイ> 雨季米の主要産地は十分な降雨も、その他産地の降雨は平年以下
- <ベトナム> 北部では冬春作の収穫が終了。南部では雨季米早稲の収穫開始

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 作付面積の減少により、生産量は 5.7 百万トン下方修正
- <ブラジル> 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 2022/23 年度の輸入量は、減産により史上最高の見通し
- <中国> 2023/24 年度の実産量・消費量は史上最高
- <カナダ> 作付面積の増加により、生産量は 2.0 百万トン上方修正

- (参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7
- (参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- (参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・ 2 8

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル・マットグロッソ州の冬とうもろこしの収穫（7月4日撮影）
 ブラジルの 2022/23 年度産とうもろこしは天候に恵まれ、史上最高の豊作が見込まれている

(概要編)

I 2023 年 7 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では冬小麦等が成熟期から収穫期、とうもろこしや大豆等の作物が生育期を迎えている一方、南米では 2022/23 年度産が収穫期を迎えている。

品目別にみると、7 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度豊作だった豪州やロシアで減産となるものの、前年度高温乾燥の被害を受けたインドや EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意が 7 月 17 日に期限を迎え、ロシアが離脱を表明。今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナ等で減産となるものの、米国や EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で増産となることに加え、今後作付けが行われる南米で前年度の干ばつから回復し、世界全体での生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、5 月の 124.0 から、6 月(最新値)は 122.3 に下落（参考：2022 年 6 月 154.7、2021 年 6 月 125.3、2020 年 6 月 93.3）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 6 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 7 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の7月見通しによれば、ウクライナの2023/24年度の小麦の生産量・輸出量は6月見通しから変更はなく、それぞれ1,750万トン（対前年度比16%減）、1,050万トン（同34%減）。とうもろこしは、作付面積の引上げにより生産量・輸出量が上方修正され、それぞれ2,500万トン（同7%減）、1,950万トン（同30%減）。（参考1）。

ウクライナ穀物協会の7月5日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は6,900万トンと、2022/23年度の7,380万トンより6.5%減となる見通し。ロシア侵攻以前の過去最高だった2021/22年度（1億600万トン）と比較すると35%減。減産の要因は、ロシアの侵攻による軍事行動や地雷埋設、資金や農業資材の不足等。

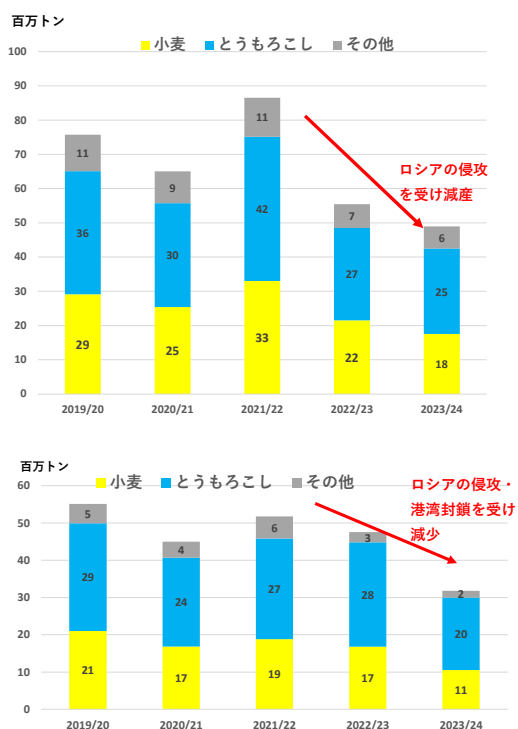
品目別には、小麦は作付面積の減少により1,790万トン（2021/22年度3,300万トン、2022/23年度2,020万トン）、とうもろこしも同様に作付面積の減少により2,420万トン（2021/22年度3,760万トン、2022/23年度2,730万トン）の見通し。

冬小麦の収穫が開始され、ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年7月14日時点で71万トン収穫された。今後、小麦の収穫が本格化する。

黒海穀物イニシアティブの状況（7月21日時点）

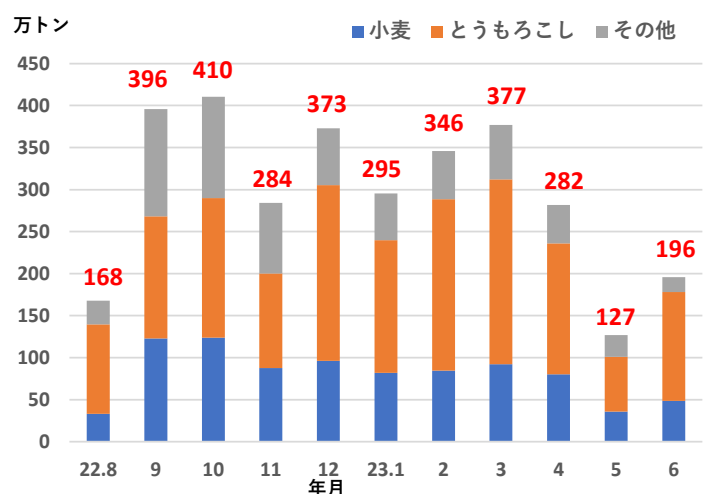
2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、同年8月以降、オデーサ港等3港から輸出を再開。2022年8月～23年6月累計の輸出量は3,254万トン（うち、とうもろこし1,672万トン、小麦887万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ等（参考2）。本合意（当初の期限は2022年11月18日、その後2023年3月18日・5月18日とそれぞれ60日間延長と計3度に亘り延長）は、7月17日にロシアが離脱を表明。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.7） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料(2023.6月末時点)

注：その他はひまわり油・大麦など。陸路による輸出を除く。

1 黒海穀物イニシアティブはロシアが7月17日に離脱を表明し停止

2022年7月22日に合意し、これまで計3回の延長を経て、本年7月17日に期限を迎えたウクライナ産穀物の輸出に関する「黒海穀物イニシアティブ」は、ロシアが離脱を表明し停止となった。ロシア側は、イニシアティブと同時に締結された「ロシア産の食品及び肥料の世界市場への展開についての協力に係るロシア連邦と国連事務局の間の相互理解に関するメモランダム」にある輸出への障害の除去が履行されていないとしている。同時に、履行され次第の復帰も示唆した。これに対し、国連のグテーレス事務総長は声明で、「ロシアの離脱は大変遺憾」と表明し、ロシアの輸出の障害を取り除く国連の取組について理解が得られなかったと言及。

その後、報道等によれば、ロシアはオデーサ港の穀物輸出インフラへの攻撃や、ウクライナへ向けて黒海を航行する船舶を軍事物資輸送船とみなすとの措置をとった。

ウクライナのゼレンスキー大統領は、ロシア抜きで、国連、トルコとともに同イニシアティブの継続を計画している。また、トルコのエルドアン大統領は、プーチン大統領との協議を計画しており、今後の動向に注視が必要。(7月21日時点)

2 ブラジルの冬とうもろこし収穫開始も降雨で昨年より遅れ

ブラジル食料供給公社(CONAB)の7月見通しによれば、収穫が終了した大豆の生産量は史上最高の1億5,457万トン(対前年度23.1%増)、とうもろこしの生産量も史上最高の1億2,777万トン(対前年度12.9%増)の見通し。

このうち、収穫がすでに終了した夏とうもろこしは2,735万トン(対前年度9.3%増)となったことに加え、現在収穫中の冬とうもろこしも1億41万トン(対前年度14.0%増)と冬作だけで初めて1億トン超えとなる見通し。冬とうもろこしの収穫状況については、主産地のマト Grosso 州で7月14日時点で68%となっており、前年同期と比べて17ポイント遅れている。

なお、中国向けとうもろこし輸出が前年末から開始されており、7月17日のロシアによる黒海穀物イニシアティブからの離脱により、ウクライナ産とうもろこしの対中国向け輸出が不透明なことに加え、米国から中国へのとうもろこし輸出量は減少傾向にあり、本年産もブラジル産とうもろこしの相当量の中国向け輸出が見込まれる。

3 カナダの小麦作付面積は過去20年間で最大

カナダ統計局が6月28日付けで公表した2023年産の主要作物(小麦、菜種、大豆等)の作付面積は、市場価格が高く生産者の作付意欲が高まり、前年より増加。

カナダ西部で主に栽培される小麦については、過去20年で最大レベルの1,090万ヘクタール(対前年比6.7%増)となり、特に主力の春小麦の作付面積が8%増となった。州別では、主産地のアルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州の3州いずれも作付面積が増加した。

また、同じくカナダ西部で栽培される菜種については、894万ヘクタール(対前年比3.2%増)となり、州別では、アルバータ州、マニトバ州で作付面積減少も、最大生産州サスカチュワン州で増加した。

主に東部で栽培される大豆については、228万ヘクタール(対前年比6.8%増)となり、州別では、最大生産州オンタリオ州で作付面積減少も、マニトバ州で41%増加し、カナダ全体での作付増加に寄与。

II 2023 年 7 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、6 月末、230 ドル/トン台前半で推移。7 月に入り、米国冬小麦の収穫遅延等から一時 240 ドル/トン台前半に値を上げたものの、米国産の輸出低迷や、7 月米国農務省需給報告で米国産の生産量の上方修正から 220 ドル/トン台後半に値を下げた。その後、カナダや米国北部での乾燥による供給懸念や、黒海経由のウクライナ産穀物輸出合意からのロシアの離脱、ロシアによるウクライナの港湾への攻撃等から値を上げ、7 月下旬現在、260 ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、6 月末、210 ドル/トン台後半で推移。7 月に入り、米国中西部での乾燥懸念等から 220 ドル/トン台半ばまで上昇したものの、7 月米国農務省需給報告で生産量の上方修正から 210 ドル/トン台後半に値を下げた。その後、黒海穀物イニシアティブの先行き不透明感から乱高下した後、7 月下旬現在、210 ドル/トン台前半で推移。

コメは、6 月末、530 ドル/トン台半ばで推移。7 月に入り、主要アジア諸国からの需要継続によりタイ国内の価格（農家庭先価格、小売価格）が上昇したことや、インドが非バスマティ米の輸出規制を強化するといった観測等から値を上げ、7 月中旬現在、550 ドル/トン台前後で推移（7 月 20 日に非バスマティ米の精米の輸出を禁止）。

大豆は、6 月末、560 ドル/トン台で推移。7 月に入り、米国農務省が 6 月 30 日に発表した作付面積が市場予想を下回ったことから 570 ドル/トン台前半まで値を上げたものの、米国中西部での降雨予報等から 540 ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、米中西部で続く乾燥への懸念等から値を上げ、7 月下旬現在、550 ドル/トン台前後で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 3.1% 増の 28.3 億トン。消費量は、前年度より 1.8% 増の 28.2 億トン となり、2019/20 年度以来、4 年ぶりに生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加するが、消費量が増加するため、期末在庫率は、前年度を下回り 27.5% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.3 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.2 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加し、5.1 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前年度より増加、期末在庫率は、前年度より上昇する見込み。

（注：数値は 7 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.7 億トン。消費量は前年度を上回り 6.5 億トン となり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は 2 年ぶりに前年度を上回る 21.4% となる見込み。

（注：数値は 7 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：米国の生育状況と貿易動向

米国農務省が6月30日付けで作付面積調査結果を公表した。小麦、とうもろこしの面積は増加も大豆は減少した。生育状況は5月から6月にかけて中西部で高温乾燥となったが、6月末から7月上旬の降雨で一部改善されたとみられる。一方、米国の穀物等の輸出については、小麦はロシア、とうもろこし、大豆はブラジルの後塵を拝している。黒海穀物イニシアティブが7月17日に停止した中、米国の生産動向と世界の穀物貿易への影響をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、米国のとうもろこしは2023年9月から2024年8月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 作付面積調査結果

米国農務省(USDA)が6月30日付けで公表した2023年産の作付面積調査によれば、小麦の作付面積は全体で対前年度比8.5%増となり、このうち7割を占める冬小麦が11%増、デュラムを除く春小麦が3%増となった一方、デュラム小麦は逆に9%減となった。

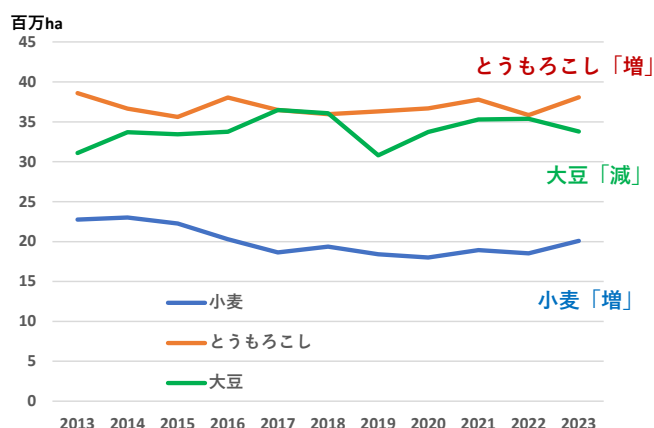
とうもろこしの作付面積は対前年度比6.2%増となり、1944年以来過去3番目の高水準。肥料の投入量が比較的多いと

うもろこしについて、肥料価格が高騰した前年よりは下落したことを受け、農家の作付け意欲が高まったことが要因とみられる。

一方、大豆の作付面積は、対前年度比4.5%減少した。肥料価格の下落に伴い、作付けがとうもろこしへシフトしたことが要因とみられる。

大豆の作付面積減少に加え、6月末における大豆の四半期末在庫も市場予想を下回ったことから、6月30日のシカゴ相場は、とうもろこし、小麦は下落する一方、大豆は大幅に上昇した。

図1 米国の作付面積の推移



出典：米国作付面積調査

2 品目ごとの生育状況

(1) 小麦

USDA「Crop Progress」(2023.7.17)によれば、冬小麦は収穫期の終盤を迎え、7月16日時点で収穫進捗率は56%となっており、前年同期(69%)と比較して13ポイント遅れている。冬小麦の作柄評価については、7月9日時点で、「良～やや良」の比率が40%で、干ばつ被害の大きかった前年同期(31%)よりは改善されている。

一方、春小麦は生育期を迎え、7月16日時点で発芽進捗率は86%となっており、前年同期(65%)と比較して21ポイント進展している。春小麦の作柄評価については、「良～やや良」の比率が6月11日時点の60%から、その後乾燥等の影響から7月9日には47%まで悪化したものの、7月16日時点では産地での降雨等を受け51%まで改善された(前年同期71%)。

USDAによる7月の生産見通しでは、冬小麦の生産見通しが6月見通しから201万トン引き上げられ3,283万トンとなり、小麦全体では対前年度比5.4%増の4,733万トンの見通し。

(2) とうもろこし

米国コーンベルトでは、5月後半から6月前半にかけて乾燥傾向となった一方、6月下旬から7月にかけて降雨に恵まれたこともあり、乾燥の影響が緩和された。

同「Crop Progress」によれば、とうもろこしは受粉期を迎えており、作柄評価については、「良～やや良」の比率が6月11日時点の61%から、中西部の乾燥等により6月25日には50%まで悪化したものの、その後産地での降雨を受け、7月16日時点で57%まで改善された（前年同期64%）。

USDAによる7月の生産見通しでは、単収の引下げがあったものの、7月の降雨を受けて引下げ幅は2.2%に留まった一方で、作付面積調査において収穫面積が2.6%上方修正されたことにより、生産量が前月より140万トン上方修正され、史上最高の3億8,915万トンの見込み。

USDAの「Feed outlook」(2023.7.14)によれば、受粉期を迎える今後数週間の降雨が作柄の決定に大きな影響を与えるといわれており、7月終盤から8月初めの天候に注視が必要である。

(3) 大豆

同「Crop Progress」によれば、大豆は開花期を迎えており、作柄評価については、「良～やや良」の比率が6月11日時点の59%から、中西部の乾燥等により7月2日には50%まで悪化したものの、その後産地での降雨を受け、7月16日時点で55%まで改善された（前年同期61%）。

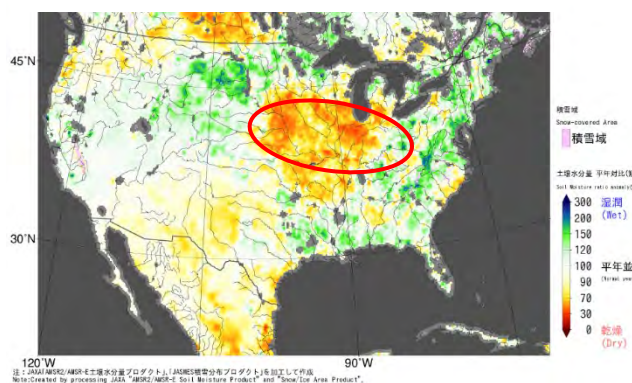
USDAの7月の生産見通しでは、作付面積調査において収穫面積が4.6%下方修正されたことにより、生産量が前月から571万トン下方修正されたものの、単収が史上最高の3.5トン/ヘクタールとみられていることから、依然として史上4位となる対前年度比0.6%増の1億1,703万トンの見込み。

大豆については、開花期を迎える7月以降8月までの降雨が作柄の決定に大きな影響を与えるといわれており、今後の天候に注視が必要である。

図2 北米の土壌水分量

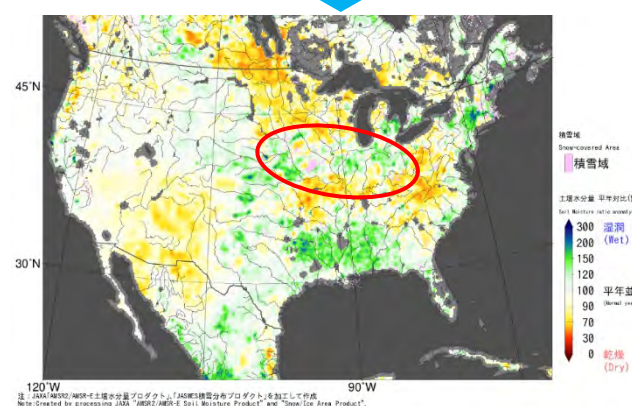
コーンベルトの土壌水分量は、6月後半（上）から7月前半（下）にかけて改善。（赤丸）

・ 2023/6/16～30



・ 2023/7/1～15

改善



3 品目ごとの期末在庫率と輸出動向

(1) 小麦

USDA の 7 月見通しでは、小麦の生産量が前月見通しと比べて上方修正されたものの、輸出量は 1,973 万トンと据え置かれた。期末在庫率は 31.9% と下げ止まりとなっている。

一方、他の小麦輸出国では、2022/23 年度史上最高の豊作となったロシアで、2023/24 年度の冬小麦の収穫が開始された。前年度（9,200 万トン）よりは減産となる見通しであるものの、史上 2 位の 8,500 万トンが見込まれ、潤沢な輸出余力がある。また、ロシアは 6 月末で輸出枠が終了し、輸出税も実質引き下げられたため価格競争力があり、対ロシア経済制裁を行っていない中東諸国向けを中心に輸出が伸びると見込まれることから、輸出量は 4,750 万トンと米国の輸出量を大きく上回る見通し。

また、豪州はエルニーニョ現象の影響による乾燥天候を受け、史上最高の生産量となった前年度よりは減産となることから、輸出量は前年度（3,250 万トン）を下回るものの、中国向けを中心に、米国の輸出量を上回る 2,150 万トンの輸出量が見込まれている。カナダについても産地の乾燥懸念はあるものの、作付面積が過去 20 年間で最高水準となることから、前年度（2,550 万トン）を上回る 2,650 万トンと高水準の輸出量が見込まれている。

(2) とうもろこし

米国のとうもろこしの輸出量は前月見通しから変更なく、増産を受けた供給増から、対前年度比 27.3% 増の 5,334 万トンの見通し。期末在庫率も過去 5 年間で最高の 15.6% と大きく上昇する見通しとなっている。

一方、ブラジルの 2022/23 年度のとうもろこし生産量は、主力の冬とうもろこしが天候に恵まれたことを受け史上最高を更新し、1 億 2,900 万トンの見通し（対前年度比 14.7% 増）。供給増を受けて輸出量も大幅に増加する見通し。

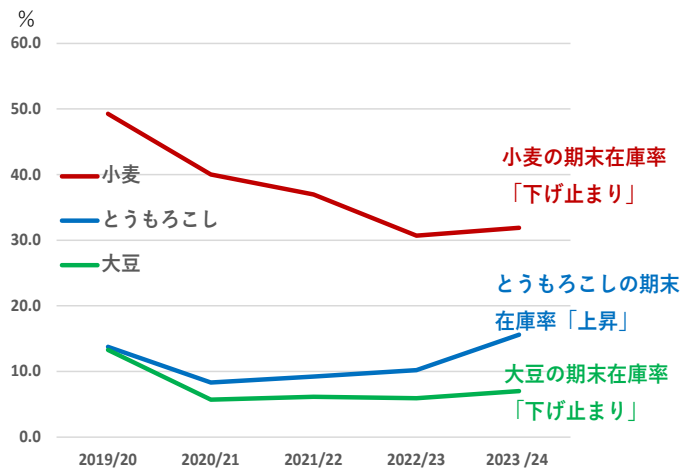
米国産は、飼料向けに加えバイオ燃料向けの需要を中心に国内向けに多く供給され、輸出は生産量の 15% 程度に留まるのに対し、ブラジル産は、バイオ燃料向けは主にサトウキビが使用されることから、生産量のうち飼料向けを除く 40% が輸出に振り向けられ、輸出余力も高い。さらにブラジルの輸出向け冬とうもろこしの収穫期が 7～9 月で、米国産の収穫期（9 月～10 月）の直前に輸出が可能となることから、市場における競争力が高い。こうした背景から、ブラジルの 2023/24 年度の輸出量は 5,500 万トンで、2 年連続で米国の輸出量を上回る見通し。

(3) 大豆

米国の大豆の輸出量は、作付面積調査結果において生産量が下方修正されたことに伴う供給量の引下げにより、5,035 万トンに下方修正された。期末在庫率は 7.0% と前年度（5.9%）よりは上昇も低水準に留まる見通し。

一方、ブラジルの 2022/23 年度の大豆は収穫が終了し、生産量は史上最高を更新し、1 億 5,600 万トン（対前年度 19.5% 増）の見通し。輸出量も大幅に増加し、2023/24 年度の輸出見通しでは、ブラジルの輸出量は 9,650 万トンで米国の輸出量を大きく上回る見通し。

図 3 米国の期末在庫率の推移



かつては、米国はミシシッピ川のバージ（舢舨）による大量輸送に、またブラジルはマットグロッソ州等内陸部の産地から南部のパラナグア港等までのトラックによる長距離輸送に、それぞれ依存していたため、輸送コストの点で米国産が優位であった。しかし、近年は、ブラジルの南北を縦断する鉄道・道路の整備や、北部からの輸出の増加などインフラ改善も進み、ブラジル産の輸出競争力が増加している要因となっている。6月20日には、北部のマラニョン州イタキ北部港とサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通したほか、7月5日には、バイア州イリエウスで2026年完成予定の東西統合鉄道の第1区間の敷設工事起工式が行われた。

4 今後の国際穀物貿易へ影響を与える動向

（1）ロシアの黒海穀物イニシアティブからの離脱

2022年7月22日にロシア、ウクライナ、トルコ及び国連の4者で合意された「黒海穀物イニシアティブ」については、これまで3度の延長後、本年7月17日に期限を迎えた。ロシアは同イニシアティブと同時に国連とロシアとの

（参考）黒海穀物イニシアティブ復帰へのロシア側の条件

- ・ロシア農業銀行への SWIFT 再接続
- ・農業機械や肥料産業向け機械等のロシア向け輸出規制の解除
- ・輸出船舶の傭船や保険への障害の除去
- ・アンモニアのパイプラインの再開
- ・ロシアの農業関係企業の海外資産の凍結解除

間で締結された「ロシア産の食品及び肥料の世界市場への展開についての協力に係るロシア連邦と国連事務局の間の相互理解に関するメモランダム」について、欧米による制裁を受け、これまで繰り返し要請してきたロシア農業銀行の SWIFT への再接続や、ロシア・トリアッティとウクライナ・オデーサとの間を結ぶアンモニアのパイプラインの再開等が履行されなかったとして、7月17日に同イニシアティブからの離脱を通告し、同イニシアティブは停止となった。この際、ロシアは、同イニシアティブによるウクライナの農産物輸出についても、主に欧州の先進国向けであり、アフリカ諸国向けとなっていないとして批判した。

同イニシアティブの停止を受け、ロシア国防省は7月20日以降、黒海経由でウクライナの港に向かう全ての船舶は軍事関連物資を積んでいる可能性があるとの警告を行った。さらに、報道等によれば、オデーサ港やドナウ川沿いの穀物輸出施設への攻撃が行われた。

国連グテーレス事務総長は、ロシアの同イニシアティブの離脱の決定を深く遺憾に思うとの声明を発表した。21日に開催された国連安全保障理事会において、ロシア側は黒海穀物イニシアティブの復帰の条件として、農業銀行の SWIFT 再接続など、従来の主張を繰り返した。これに対し、グテーレス事務総長はロシアの黒海穀物イニシアティブへの速やかな復帰を繰り返し要請している。

（2）ウクライナの輸出継続に向けた動き

同イニシアティブからのロシアの離脱を受け、ウクライナは国連とトルコと協力して、同イニシアティブの延長や、隣接するルーマニアの海域を利用した輸出などを模索している。イニシアティブ停止（7月17日）以前に公表された2023年7月の米国農務省需給報告では、ウクライナの2023/24年度における小麦及びとうもろこしの輸出量は、それぞれ1,050万トン（対前年度比34%減）、1,950万トン（同30%減）と見通されている。ロシアの侵攻を受け、侵攻直前の史上最高となった2021/22年度を大きく下回っているが、輸出量がさらに下回るといった影響が出てくる可能性もある。

東欧5か国（ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア）はウクラ

イナ産の小麦、とうもろこしなどのトランジットを除く輸入を9月15日まで禁止しているが、9月15日以降も継続したいとの意向を打ち出している。ただし、黒海穀物イニシアティブを通じて輸出していた3,200万トン超（2022年8月～2023年6月）の穀物等を全量EU経由に振り替えて輸出することは陸路等での輸送キャパシティに限界があり、現実的には難しい面もある。

トルコのエルドアン大統領は、黒海穀物イニシアティブについてプーチン大統領と協議をしたい意向を持っているものの、現時点では未定である。

（3）米国及び中国の動向

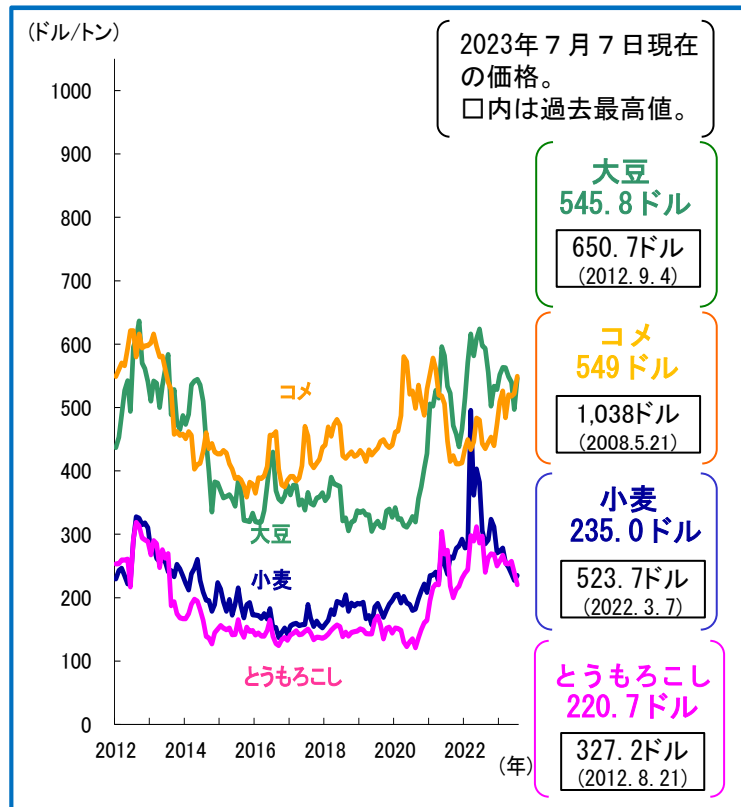
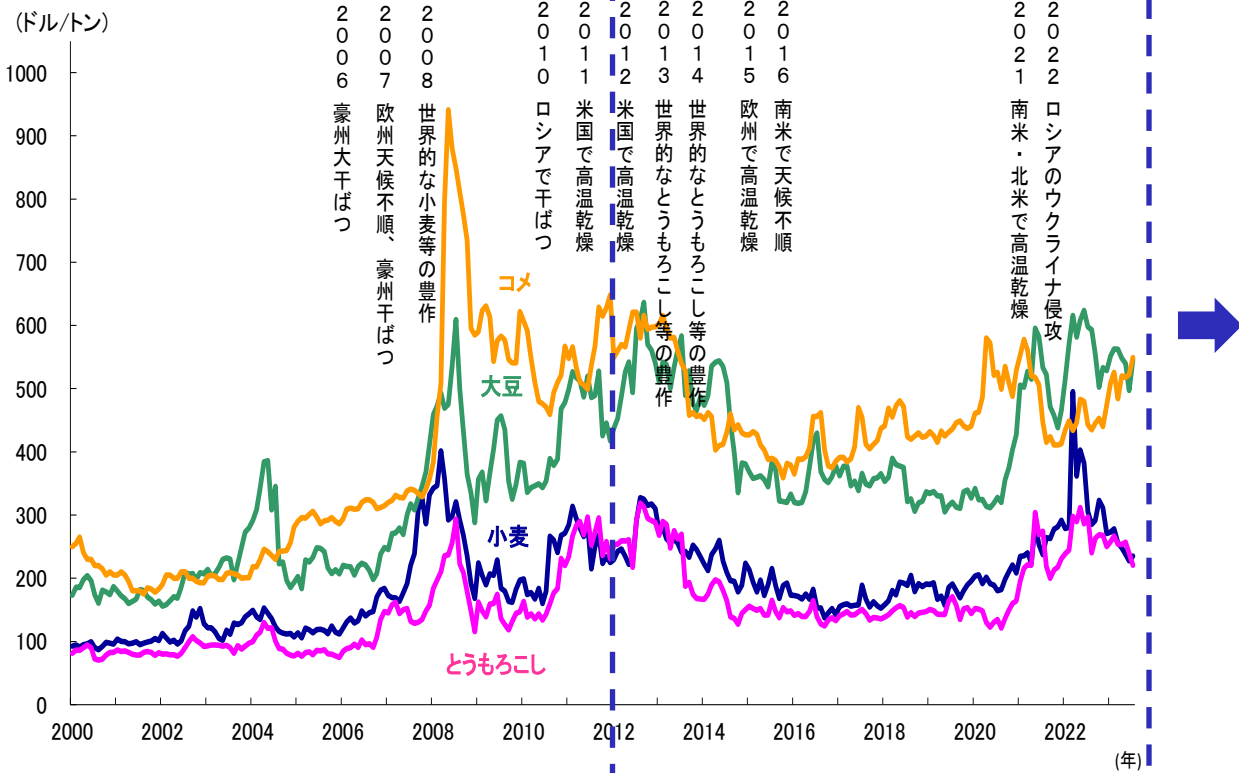
米国のブリンケン國務長官は、ロシアが黒海穀物イニシアティブからの離脱を表明した7月17日に、ロシアの対応が食料を武器にした行為であるとして遺憾を表明するとともに、ロシアの穀物輸出については、WFP（世界食料計画）の支援に参加せず、アフリカの最貧国などに向けられていないと批判した。米国の穀物輸出については、同イニシアティブの前年夏以降の履行時期において、他の輸出国と比べて価格競争力が乏しい等を背景として輸出は低調となっていたが、今後、ウクライナの輸出が完全に停止する等の事態となった場合、米国産を含む他国産への代替需要が増加する可能性もある。

同イニシアティブを利用したウクライナからの穀物輸入で最もシェア（2割強）の大きい中国は、18日の外交部の定例記者会見において、関係者が対話と協議を通じて国際食料安全保障の問題を適切に解決できることを期待しているとの見解を示した。中国は同イニシアティブを通じて主にととうもろこしを輸入してきたが、8月以降は収穫期を迎えたブラジル産に輸入先を切り替えるとの見方もあり、中国の穀物需要が堅調である中、今後における国際需給や価格への影響も懸念される。ロシアによる同イニシアティブからの離脱を受けてのウクライナの輸出動向を含め、国際穀物貿易や各国の生産動向をめぐる新たな動きが出てくる可能性もある中で、国際的な穀物需給や価格動向に引き続き注視が必要。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下も、2020年ベトナムの輸出枠設定等で一時的に上昇。2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



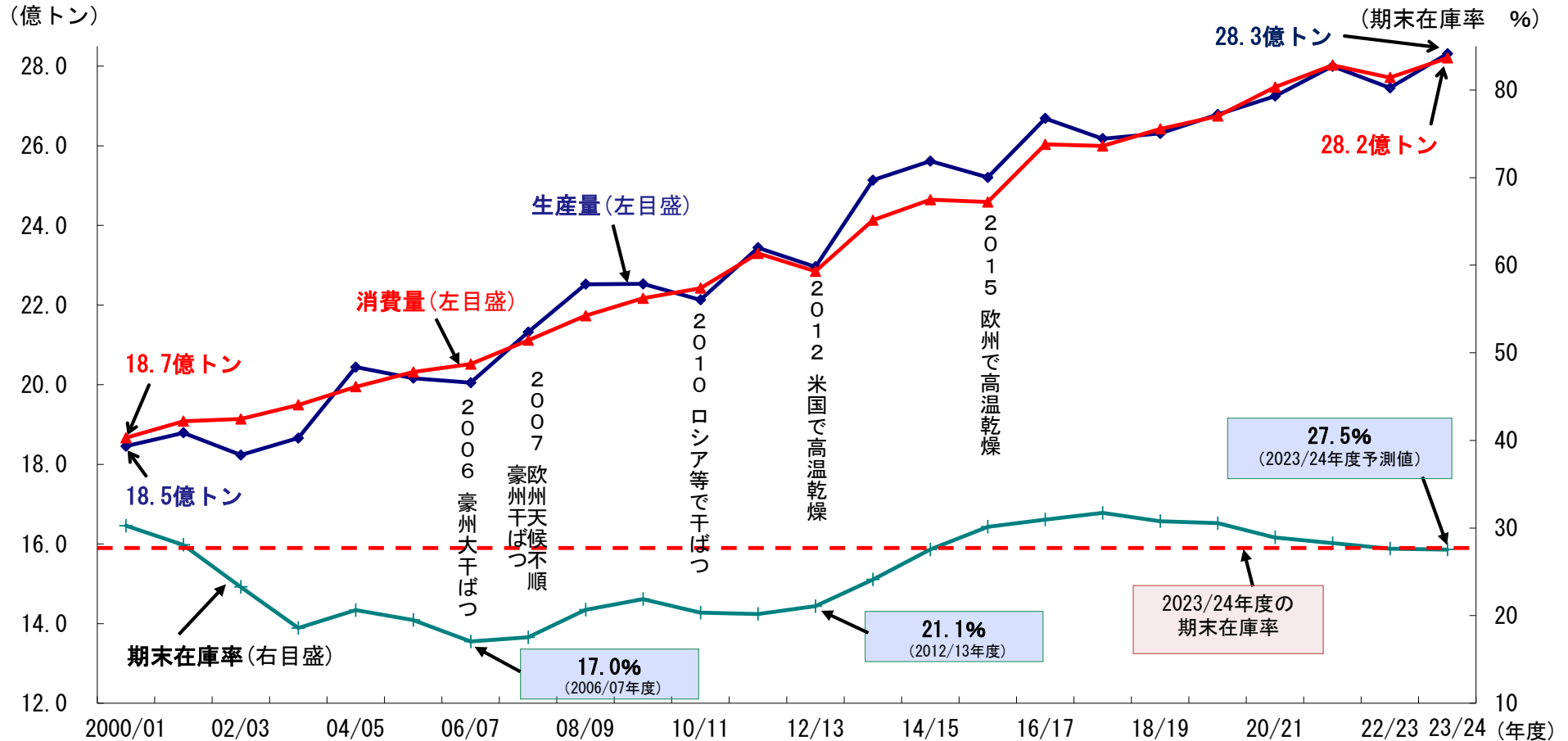
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である（但し、4月は7日が休場であったため、6日の価格）。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回ったものの消費量が増加したことから前年度より減少し、27.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

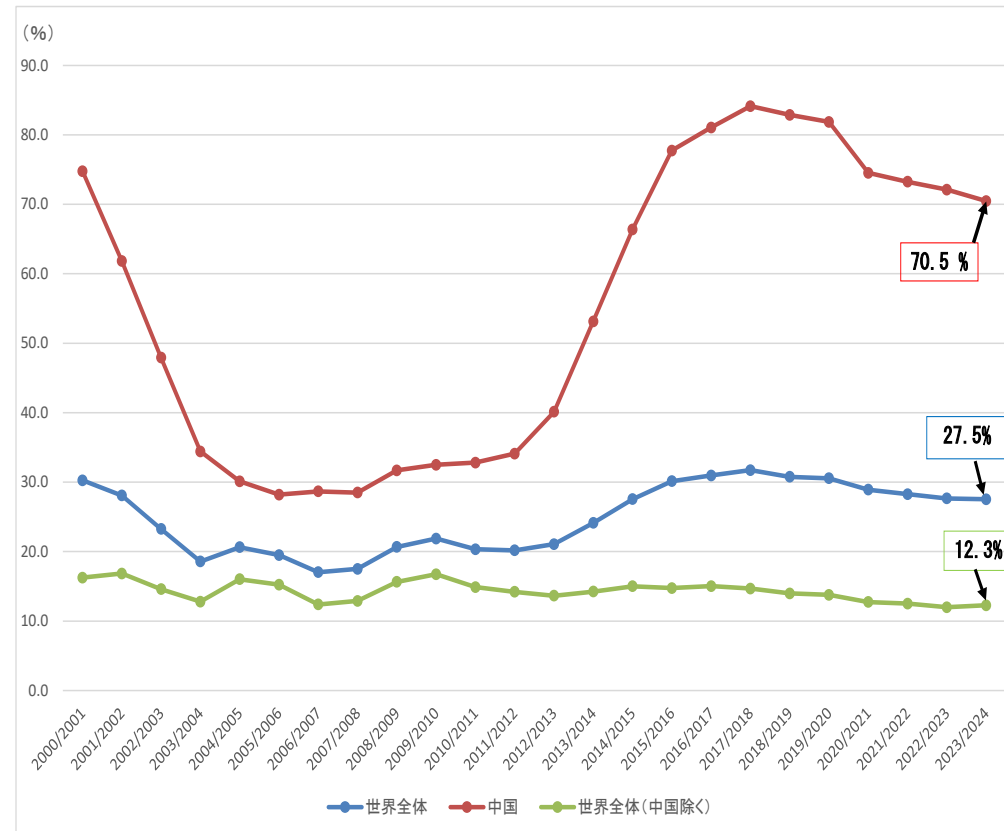


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(July 2023)、「IPS&D」

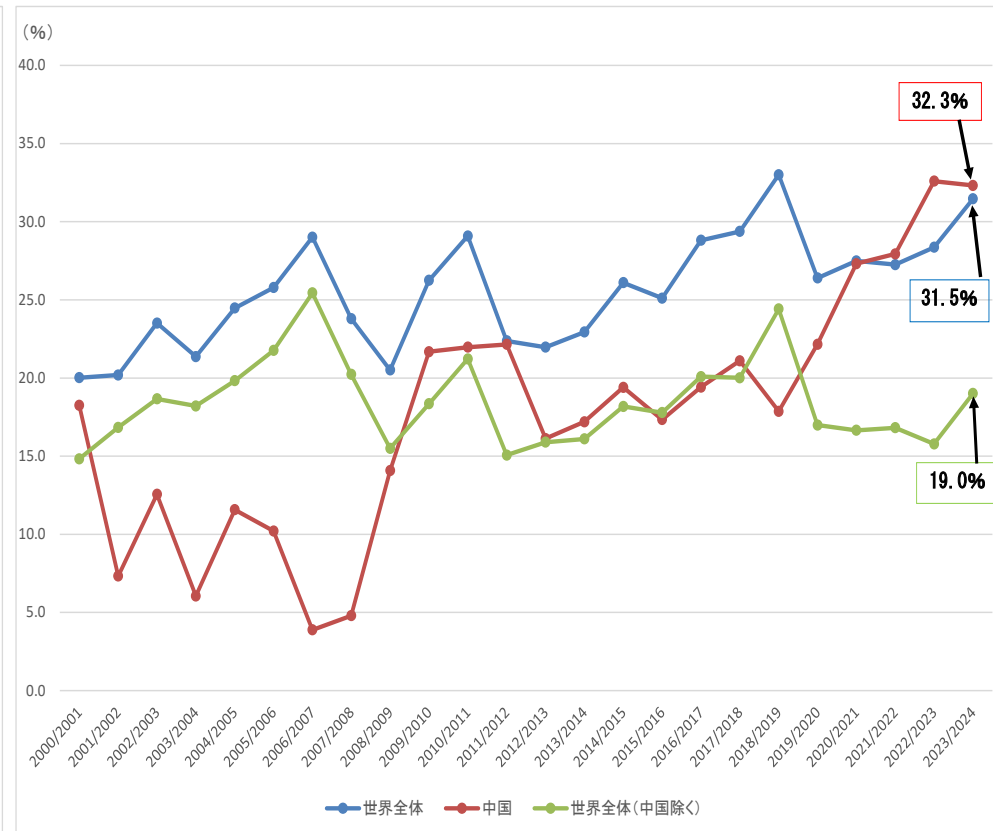
(注) なお、「IPS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2023)

注: 1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

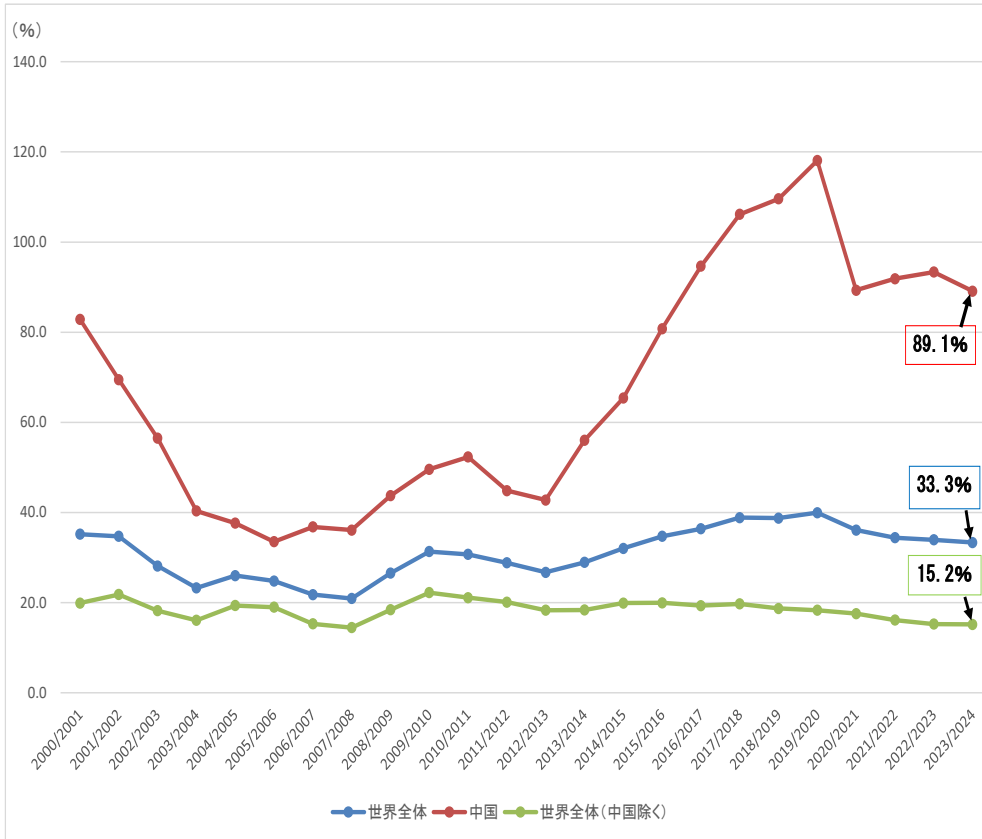
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

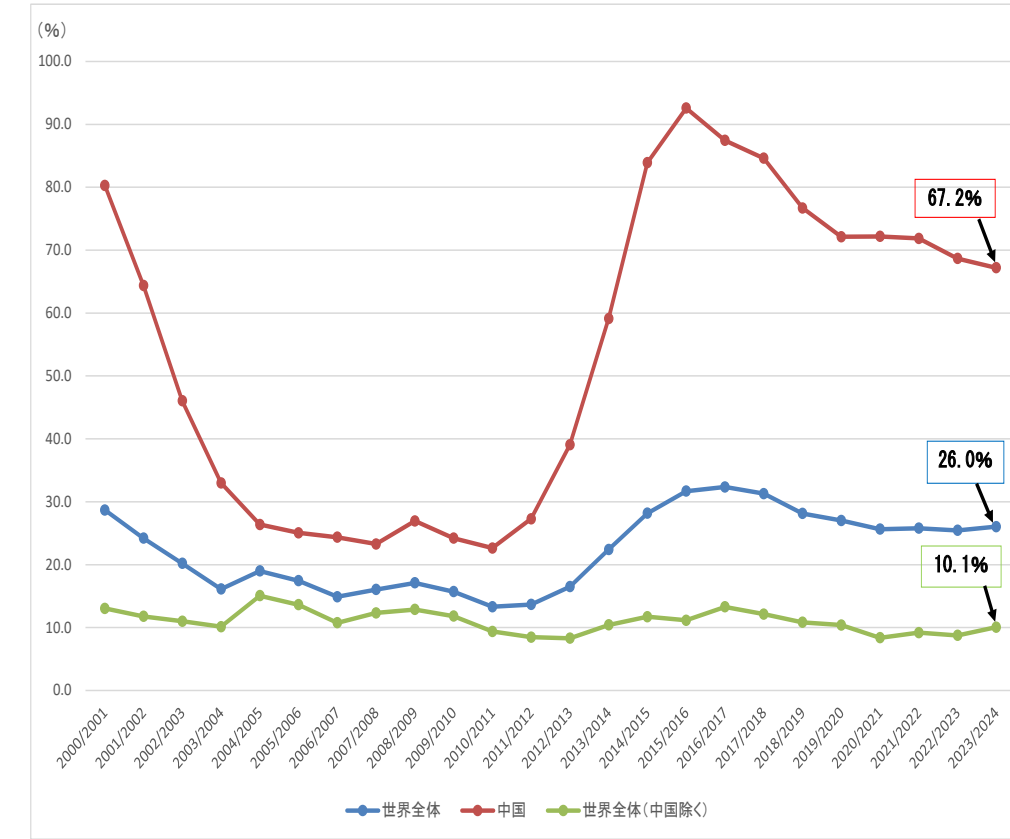
4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

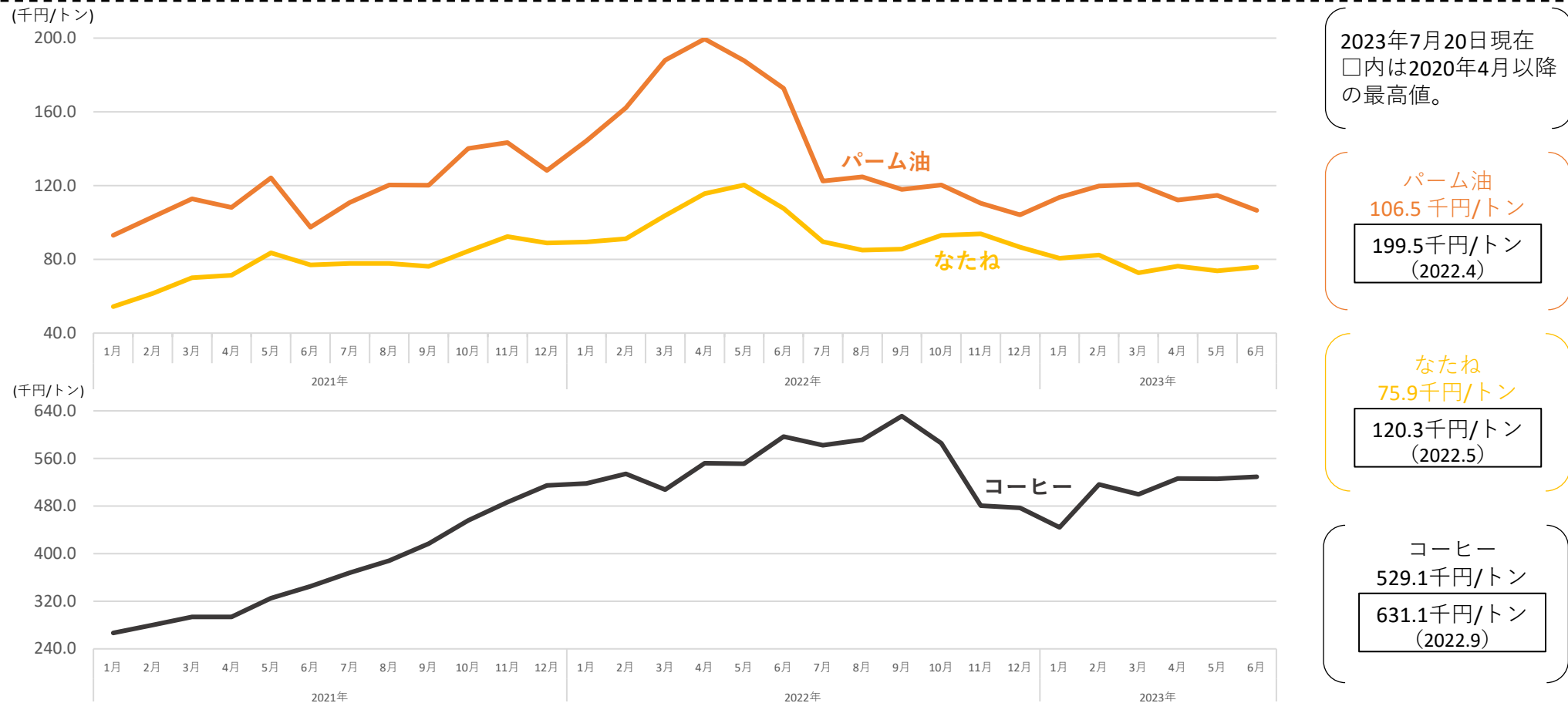
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。

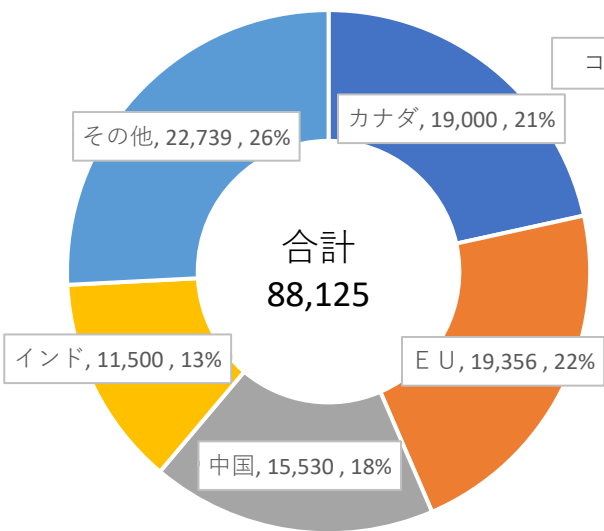


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

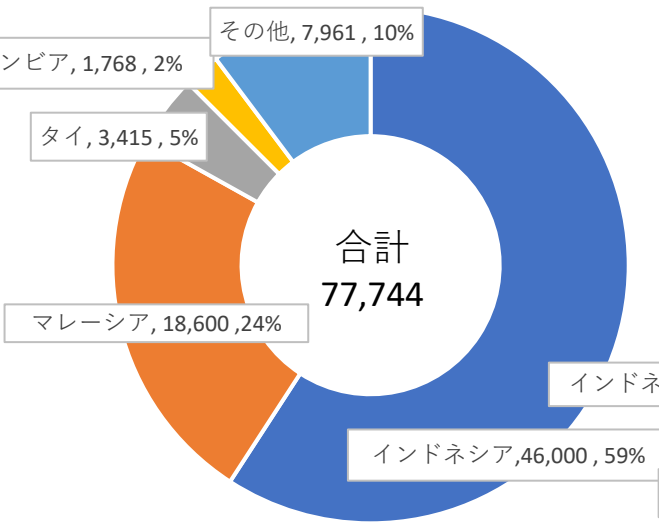
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



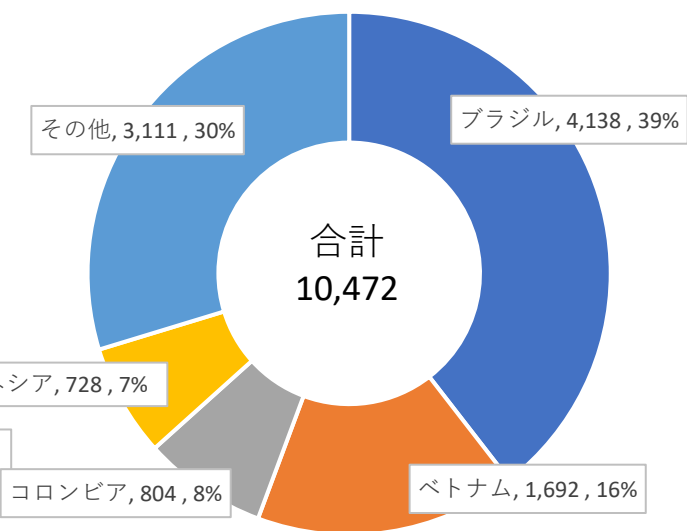
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年6月の国内の加工食品の消費者物価指数は107.7～162.1（前年同月比で6.5%～29.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年1月～令和5年6月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	115.0	115.0	114.3	114.8	115.3	115.0	6.5%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	113.1	114.6	113.1	113.9	111.4	124.3	13.0%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	110.3	110.4	112.0	114.5	114.6	115.2	9.9%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	164.0	163.9	164.3	163.0	164.1	162.1	16.5%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	104.5	105.9	106.5	107.1	107.7	107.7	7.9%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	137.3	137.2	139.0	148.6	152.3	153.0	22.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	119.2	121.4	121.9	133.9	134.5	134.8	29.6%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.6	98.6	98.9	109.8	111.2	111.4	12.2%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	108.7	109.4	110.2	111.6	112.1	112.7	9.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年1月～令和5年7月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5										
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)		
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.5	110.7	111.3	111.3	111.3	111.3	116.5	4.7%	10.0%		
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	111.2	110.6	110.6	111.8	121.6	122.8	1.0%	11.6%		
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	108.5	108.1	110.2	113.7	114.1	115.0	114.6	-0.3%	11.4%		
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	162.2	162.2	161.9	161.2	161.2	160.6	160.0	-0.4%	20.6%		
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.3	103.4	103.6	105.2	105.0	105.2	105.0	-0.2%	6.3%		
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	129.6	128.9	130.3	137.9	142.7	144.4	144.1	-0.2%	21.8%		
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	116.9	118.4	117.9	129.3	130.3	130.7	130.3	-0.3%	24.1%		
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.4	108.9	110.3	110.7	111.4	0.6%	12.2%		

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年8月号（7月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）23年5月の肥育牛価格は依然高水準も、牛肉生産量は前年並み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002841.html

（豪州）肉牛価格、22年9月の約半値の水準まで下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002842.html

（アルゼンチン）23年の肉用牛と畜頭数、干ばつの影響で前年を上回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002843.html

◆豚肉

（米国）23年1～4月の豚肉輸出量はかなりの程度増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002844.html

（カナダ）23年は豚肉生産量、輸出量ともに前年を下回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002845.html

（EU）豚肉卸売価格は上昇、輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002846.html

（中国）豚肉価格は引き続き低迷も、子豚価格は小幅な上昇に転じる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002847.html

◆牛乳・乳製品

（EU）乳製品価格の下落により、バターと脱脂粉乳の輸出量が増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002849.html

（豪州）23/24年度乳価、9豪ドル超えも上昇余地は限定的

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002850.html

（NZ）22/23年度の生乳生産量、前年度よりわずかに減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002851.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）ウクライナの増産見込みなどから、期末在庫はやや増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002852.html

（世界：大豆）23/24年度は南米の生産増などから、大豆期末在庫は大幅に増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002853.html

（米国）22/23年度の輸出量の下方修正などから、23/24年度の期末在庫は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002854.html

（ブラジル）22/23年度第2期作トウモロコシの収穫開始、大豆の収穫はほぼ終了

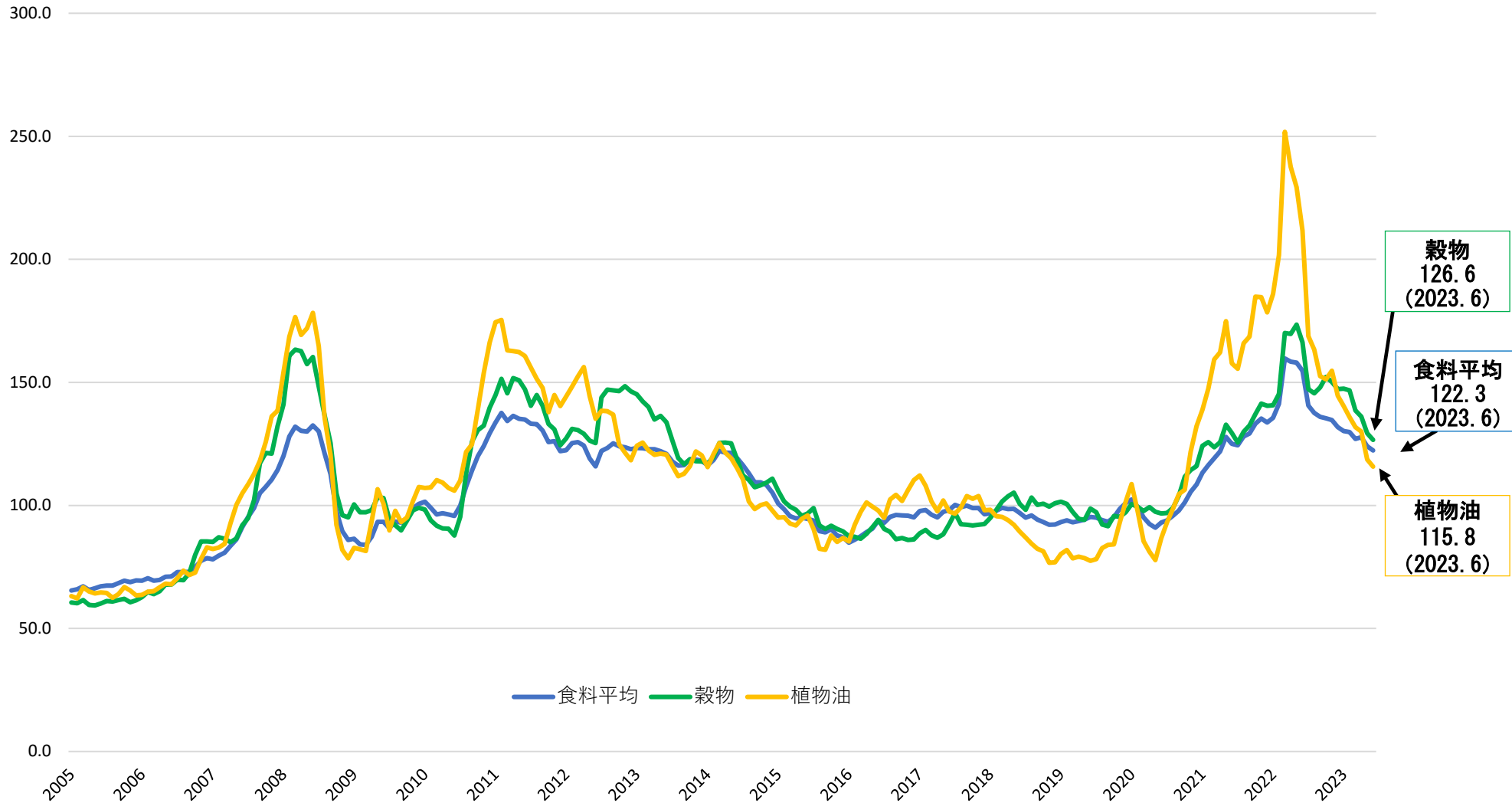
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002855.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002856.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.7)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】★シンガポールの食料事情③：シンガポール人の日本食評価

シンガポール情勢の最終回となる今回は、シンガポール人の日本や日本食に対する評価、日本からの食品輸出の課題についてお話させて頂ければと思います。

1. 大きな訪日観光需要

人口 560 万人のシンガポールにおいて、コロナ以前の訪日観光客は一貫して増加してきました。シンガポールの訪日客は、2014 年 22.8 万人から 2019 年までのわずか 5 年で、約 2 倍となる 49.2 万人となりました。

加えて、シンガポール人の訪日頻度も他の国への訪問に比べてとても高く、2019 年の調査によれば、来日経験 2-5 回が半数（49.1%）を占めております。

コロナ後もこの需要は衰えておりません。2022 年 8 月の調査では、シンガポール人の約半数が「次回バケーションでの訪問国」を日本（49%）と回答しており、二位の台湾（39%）や三位の韓国（33%）を大きく上回っていました。特に、若者層からの大きな支持を集めています（16-24 歳の 68%、25-34 歳で 58%）。

（次回バケーションでの希望訪問国の割合（2022 年 8 月））

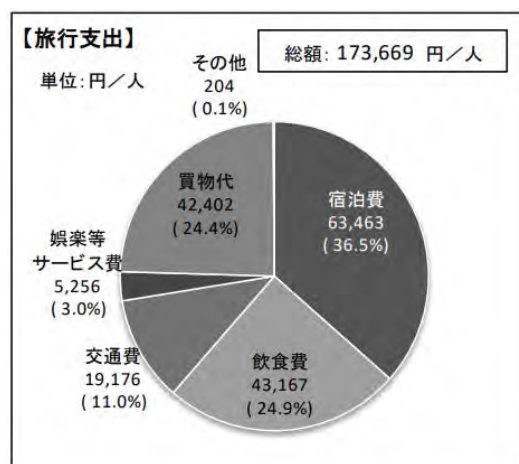
Rank	Destination	Consideration %
10	United Kingdom	18%
9	China	20%
8	Switzerland	24%
7	Malaysia	26%
6	Thailand	27%
5	Australia	29%
4	New Zealand	32%
3	South Korea	33%
2	Taiwan	39%
1	Japan	49%

実際に、直近の 2023 年 5 月の訪日客は、昨年同月比で大幅増（+4000%）となっただけでなく、コロナ前の 2019 年と比較しても 32%増となっており、引き続き大きい観光需要が伺えます。

2. 日本食への高い関心

訪日するシンガポール人の支出先について、コロナ前の 2019 年のデータによれば、シンガポール人の支出割合の最も大きい項目は宿泊費（36.5%）ですが、それに次いで飲食費（24.9%）、買物代（24.4%）となっております。また、買い物のうち購入率が最も高いのは菓子類（69.8%）と、二位衣類（37.3%）三位その他食品（36.8%）を大きく上回っており、日本の食への高い関心が伺えます。

(シンガポールの訪日客の支出状況)



● 買い物ランキング ●

◆購入した費目◆ (複数回答)				◆満足した購入商品◆ (単一回答)		
購入率 順位	費目	購入率 (%)	購入者単価 (円)	順位	商品小区分	回答率 (%)
1位	菓子類	69.8	10,696	1位	菓子類	35.9
2位	衣類	37.3	23,336	2位	衣類	13.5
3位	その他食料品・飲料・たばこ	36.8	10,194	3位	靴・かばん・革製品	12.9
4位	化粧品・香水	29.3	21,251	◆買物場所◆ (複数回答)		
5位	靴・かばん・革製品	23.4	32,746	順位	買物場所	回答率 (%)
6位	酒類	12.1	8,040	1位	コンビニエンスストア	70.0
7位	医薬品	11.4	16,121	2位	百貨店・デパート	64.1
8位	健康グッズ・トイレタリー	11.2	11,951	3位	空港の免税店	58.8
9位	民芸品・伝統工芸品	7.6	9,370	4位	スーパーマーケット	54.4
10位	生鮮農産物	6.4	8,898	5位	ドラッグストア	44.3

シンガポールにおける訪日ニーズの高さにはいくつか理由があります。日本の伝統文化やサブカルチャー、日本食への関心が高いのはもちろんですが、それを高めてきた要因として特徴的な番組があります。

シンガポール国営放送（CNA）で毎週土曜 20 時から放送されている「Japan Hour」は 30 年以上続く人気番組です。日本企業がスポンサーとなり、日本のテレビ番組を英語字幕でそのまま放送しており、シンガポール人で知らない人はいない程の人気番組です。

この番組では旅・グルメ系番組が多く、インターネット普及以前から、日本の観光需要喚起に長年寄与してきました。2007 年の日シンガポール首脳会談においても、当時のリー首相は両国の良好な関係を象徴するトピックとして同番組に言及しております。

(「Japan Hour」より)



Local Scenic Train Trip From Gunma To Tochigi Prefecture - Part 1

Highlights of this week's train trip on the Yamanote and Aizu Railway lines include checking out famous places to view autumn leaves and relaxing in scenic hot spring resorts and beautiful surroundings.



Bus VS Local Trains From Hyogo Prefecture To Amanohashidate - Part 4

The exciting "bus versus train team" battle enters its final stretch as both teams finish one last challenge at the final checkpoint, a solo restaurant, before rushing to the goal, Amanohashidate.

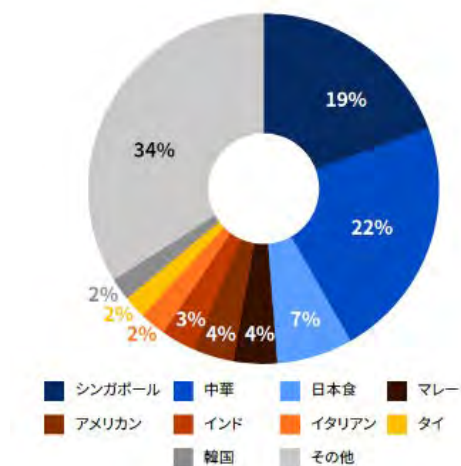


一方、日本同様、シンガポールで圧倒的に人気があるのは韓国ドラマ・K-POP と、文化面では韓国の存在感が非常に大きくなってきております。大手動画配信サービスの国内視聴上位 10 位のうち 7~8 割は韓国ドラマですし、韓国ドラマの影響で、キムチや韓国焼酎、韓国スイーツ・果物が人気となっており、日本の食品輸出面では大きな脅威となっています。

3. 日本食の普及状況と価格

シンガポール国内での日本食の普及状況について見てみると、シンガポールの日本食レストランは 1200 以上あり、現地料理・中華料理に次いだシェアを占めるほど人気です。

(飲食店サイト (Openrice Singapore) に登録されている飲食店内訳 (2022 年))



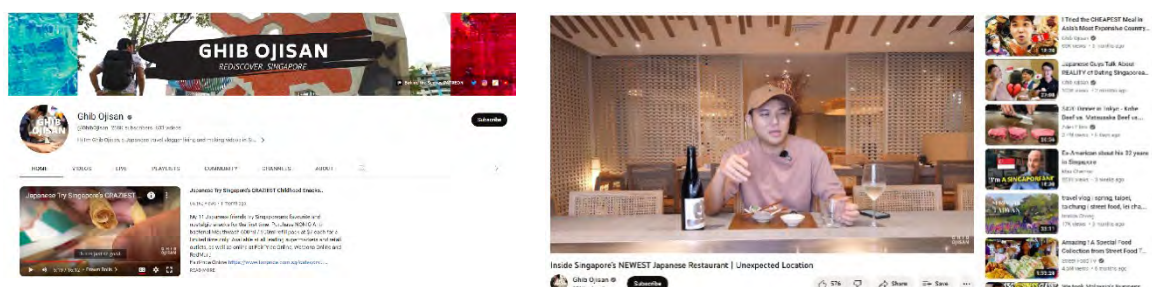
(シンガポールのレストラン店舗数 (TripAdvisor に基づくジェトロ調べ (2022 年 7 月))

中華料理	1,934
日本料理	1,218
インド料理	520
イタリア料理	487
タイ料理	424
韓国料理	279
フランス料理	212

独立した高級和食店も多くありますが、日系チェーン店も数多く進出しています。ごく一例ですが、東京 23 区ほどしかない国内に、モスバーガー (47 店舗)、シャトレゼ (40 店舗)、サイゼリヤ (30 店舗)、吉野家 (11 店舗) などありますし、他にもスシロー・一風堂・星乃珈琲店など様々なジャンルのお店が軒を連ねています。

このように国内で日本食は高い人気のため、日本食や前述の観光に特化したインフルエンサーも数多くいます。一例としては「ジブおじさん (Ghib Ojisan)」は Youtube チャンネルの登録者 26 万人で、日本食や日本料理に特化して PR しており、多くの飲食店や日本企業とコラボもしております。

(Ghib Ojisan サイト)



一方、原材料の輸入依存、土地代・人件費の高さから、外食コストは総じて高いです。屋台街 (ホーカー) では 5-10 ドル (500-1000 円) で食べられる店がある一方、チェーン系日本食レストランの客単価は 30~100 ドル (約 3 千円~1 万円) となっており、高級和食店では食事のみで 1000 ドル (約 10 万円) を超える場合も多いです。

加えて、シンガポールは酒税が高いため、小売店でも飲食店でもアルコール類は非常に高額となります。日本酒の場合、日本国内で 1500 円程度の純米吟醸酒は、こちらでの小売店価格で 50 ドル (5000 円) 程度、飲食店では 70-80 ドル (7000-8000 円) 程度となります。

(輸出日本酒のシンガポール国内での価格)

飲食店		小売店		
	酒蔵出荷額(四合瓶) (卸業者へのマージン15%は除く)	1,500円	酒蔵出荷額(四合瓶) (卸業者へのマージン15%は除く)	1,500円
	物流コスト(船便)	7\$ドル	物流コスト(船便)	7\$ドル
	酒税	9.5\$ドル	酒税	9.5\$ドル
	輸入業者マージン	10\$ドル	輸入業者マージン	10\$ドル
	飲食店マージン	40～60\$ドル	小売店マージン	15～20\$ドル
	売値	6,800～8,400円	売値	4,700～5,200円

注：上記は、2021年3月時点での聞き取り情報。
世界的なコロナ不足等により、
物流コストは上昇傾向。

注：上記は、2021年3月時点での聞き取り情報。
世界的なコンテナ不足等により、
物流コストは上昇傾向。

よくシンガポールは『富裕層が多いので高くても売れる』と誤解されがちですが、前回までのお話のように、ほぼ全量を輸入に依存している経済が故に結果的に国内価格が高くなっているだけで、普段の生活では、安い中国産・マレーシア産の商品・食品のほうが圧倒的に普及しております。そのような中で、輸入すると高くなってしまいう日本産の食品をどう PR していくかというのが大きな課題となっております。

4. 輸出の増える日本産食品

最後に、最近特に日本からの輸出・消費の伸びが大きい食品と、その動向をご説明させて頂ければと思います。

①牛肉

北米や欧州などと同様、当地では「WAGYU」の名前で定着しております。価格は豪州産 WAGYU 2～4 倍で、100 グラムあたり 50-100 ドル以上（5 千～1 万円）するものもあり大変高級ですが、「日本産和牛」は高い人気を継続しております。

一方で、「一番良くて高いもの」を好むシンガポール人の嗜好から、ステーキ用などの高級部位（ロイン系）に人気集中しております。最近では和牛以外の日本産牛肉（交雑種）の消費も増加しておりますが、引き続き和牛へのニーズが高いため、消費の多様化が課題となっております。

②水産物

和食店や小売店で、新鮮な高価格帯の日本産水産物を空輸で販売しているほか、例えば冷凍・冷蔵ホタテ、まぐろ、魚卵など、冷凍・冷蔵コンテナでも様々な水産物が輸入されています。一方で、寿司や刺身ネタとして一般消費者販売が多いのはまぐろ・サーモン・ホタテに集中しており、店頭はほぼオレンジと赤です。最近では白身魚や青魚の消費も伸びてきてはいますが、まだ一般的にメジャーなネタとなっておらず、逆に言えば今後のポテンシャルがある消費とも言えます。

③アルコール類

日本酒の輸入は長年堅調であることに加え、最近では日本産ウイスキーのプレミアム化により輸入額が増加しております。高級商品は既に入手困難ではありますが、当地若者の間で「ハイボール」の飲み方も定着してきており、低価格帯のウイスキーの輸入も増加しております。

なお、前回お話させて頂きましたが、シンガポール人は甘いものが大好きであるため、その影響もあり、日本酒は甘口のほうが人気がありますし、日本のチューハイの輸入も増えております。

④青果物

東南アジアや豪州・米国から多くの果物が輸入されている中でも、日本産の果物類果物類（いちご・シャインマスカット・柑橘類）は高い糖度のためとても人気があります。一方、小売店では日本産の価格の1/3～1/2の韓国産・中国産のシャインマスカット・巨峰のほうが売れており、これらとどう差別化し、今後販売を伸ばしていくかが課題です。

⑤小麦製品

意外に思われるかもしれませんが、日本からの小麦粉の輸出も増加しており、昨年の輸出額第3位となっております。理由の1つとしては、中国や香港でもブームになりました「日本式食パン」のブームが最初にありましたが、その後は品質の高さが評判となり、今では西洋式も含め様々なパンで日本産小麦粉が使われております。

そのため、当地日系のパン店（フォーリーブス、プルマンベーカリー等）ではもちろんですが、ローカルのパンチェーン店や菓子チェーン店でも、「日本産」をPRせずに日本産小麦粉を使っているところが出始めています。

3回に亘りシンガポールの文化や嗜好についてご説明させて頂きましたが、他の東南アジア諸国と同様、シンガポールには、第二次世界大戦の経緯から、今でも日本に対する様々な見方や考え方を持たれている方もいます。

そのような中で、現在、日本文化・観光・食品が人気を博している背景には、長年にわたる日系企業の当地での貢献や、高品質な商品・良質のコンテンツを提供し続けてきた成果だと思えます。これら過去の努力を活かしつつ、引き続き日本文化や日本産食品の魅力を普及させていかなければいけないと考えております

文責：伊藤 哲也

（日本貿易振興機構（ジェトロ）JF00D0 シンガポール代表）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・画像出典】

・ JNTO（日本政府観光局）

https://www.jnto.go.jp/news/press/20230621_monthly.html

・ Tripzilla

<https://www.tripzilla.com/travel-to-japan-from-singapore/135636>

・ 観光庁「訪日外国人の消費動向 2019 年年度報告書」

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/content/001345781.pdf>

・ CNA「Japan Hour」

<https://www.channelnewsasia.com/japan-hour>

・ 「Ghib Ojisan」 サイト

https://www.youtube.com/channel/UCJfm-feI6sSoaDwFx_vINlg

・ JETRO「カントリーレポート：シンガポールの食品市場」

https://www.jetro.go.jp/ext_images/agriportal/platform/sg/pf_spr.pdf

・ JETRO 海外流通実態調査（シンガポール）

https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfoodo/pdf/archive/distribution/report_sg.pdf

本コラムは、執筆者が現地活動で得られた情報や公開情報に基づいて作成したものです。あくまで情報提供を目的としたものであり、その正確性、相当性、完全性を保証するものではなく、当省が本コラムに従って決断した行為に起因する損失等に対して責任を負うことはありません。

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・米国等で上方修正されたものの、EU、カナダ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

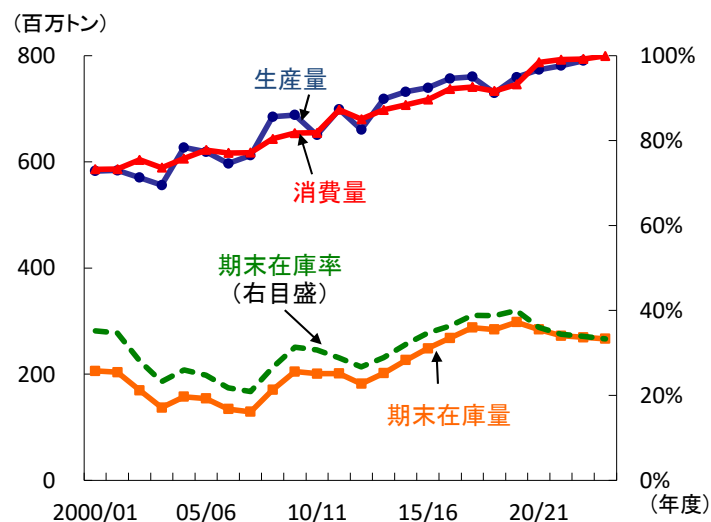
消費量 前年度比 前月比

- ・カナダ等で下方修正されたものの、中国、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・ロシア、豪州等で上方修正されたものの、アルゼンチン、カナダ等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 前月比



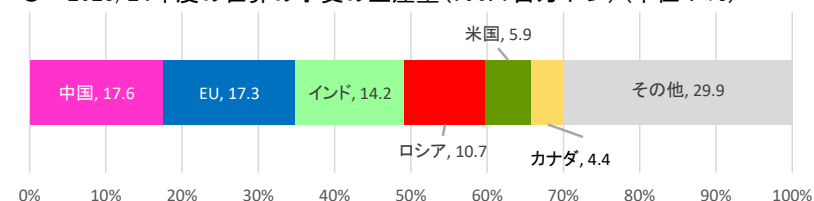
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

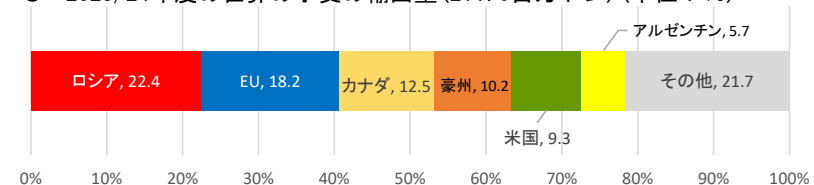
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	781.1	790.2	796.7	▲ 3.5	0.8
消 費 量	792.5	793.5	799.5	3.3	0.8
うち飼料用	161.1	156.4	157.1	2.3	0.5
輸 出 量	202.9	217.2	211.6	▲ 1.0	▲ 2.6
輸 入 量	199.4	210.5	208.0	▲ 1.6	▲ 1.2
期末在庫量	272.6	269.3	266.5	▲ 4.2	▲ 1.0
期末在庫率	34.4%	33.9%	33.3%	▲ 0.7	▲ 0.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 July 2023)

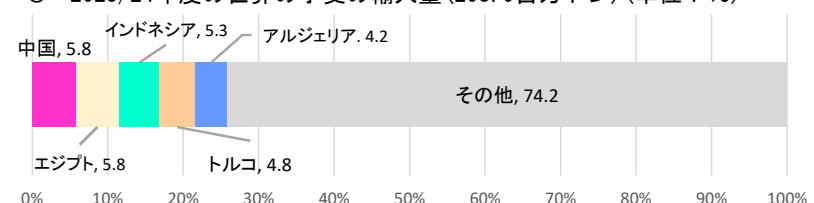
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(796.7百万トン)(単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(211.6百万トン)(単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(208.0百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の生産量は前月予測から上方修正され 47.3 百万トン

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の実生産量は、収穫面積と単収の増加から、前月予測より 2.0 百万トン上方修正され 47.3 百万トンと、過去 5 年平均を 2.8% 下回るものの、前年度に比べ 5.4% 増加の見込み。USDA「Crop Production」(2023.7.12)によれば、冬小麦は 32.8 百万トンと前年度に比べ 9.3% 増加したものの、春小麦は単収の低下から 13.0 百万トン、デュラム小麦は作付面積と単収の低下から 1.5 百万トンと、前年度に比べそれぞれ 0.7% 減、15.6% 減となる見込み。

なお、USDA 作付面積報告「Acreage」(2023.6.30)によれば、2023/24 年度の実小麦全体の作付面積は、20.08 百万ヘクタールと前年度に比べ 8.5% 増、過去 5 年平均に比べ 7.8% 増となった。品種別には、小麦全体の約 70% を占める冬小麦は 14.98 百万ヘクタールと同 11.2% 増加、春小麦は 4.51 百万ヘクタールと同 2.8% 増加した一方、デュラム小麦は 0.60 百万ヘクタールと同 9.1% 減少した。また、冬小麦主産地のカンザス州、ネブラスカ州では前年度に比べ作付面積は増加したものの、乾燥天候により耕作放棄地が増加するとみられている。

USDA の「Wheat Outlook」(2023.7.14)によれば、7 月 11 日現在、春小麦生産地の 25% が干ばつ状況にあり、単収予測が前年度を下回る等の影響が懸念されている。

USDA の「Crop Progress」(2023.7.17、7.10)によれば、7 月 16 日時点で冬小麦の収穫進捗率は 56% と前年同期(69%)、過去 5 年平均(69%)を下回っている。また、作柄評価は、「良～やや良」の割合が、7 月 9 日時点で 40% と前年度(31%)に比べ 9 ポイント増加したものの、主産地のカンザス州では 2 年続きの干ばつに見舞われ 18% と前年同期(29%)を下回っている。また、春小麦は、7 月 16 日時点で、出穂進捗率は 86% と前年度の 65%、過去 5 年平均の 83% を上回っている。また、作柄評価は、「良～やや良」の割合が 51% と前年度(71%)に比べ 20 ポイント下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、19.7 百万トンと、主要輸出国に比べ依然として価格が高く価格競争力が劣ることから、前年度に比べ 4.5% 減少し、1972/73 年度以降最低となる見込み。米国産の輸出価格(FOB)は、6 月の低調な輸出や作付面積の増加により 6 月 6 日時点の 353 ドル/トンから、335 ドル/トン(7 月 7 日時点)に低下した。2023 年 6 月の輸出量は 112.5 百万トン、輸出先国はイエメン(16.0%)、メキシコ(14.1%)、フィリピン(13.2%)の順。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

(単位：百万トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.8	44.9	47.3	2.0	5.4
消 費 量	29.8	30.8	30.8	0.6	0.1
うち飼料用	1.8	2.4	2.5	0.5	4.3
輸 出 量	21.7	20.7	19.7	-	▲ 4.5
輸 入 量	2.6	3.3	3.5	▲ 0.1	6.6
期末在庫量	19.0	15.8	16.1	0.8	2.1
期末在庫率	37.0%	30.7%	31.9%	1.3	1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.27	0.26	6.3
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.10	0.08	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 July 2023)

表：米国産小麦の作付面積

(面積：百万ヘクタール 対前年度比：%)				
	2022/23年度	2023/24年度 面積報告 (2023.6)	過去5年平均	
冬小麦	13.46	14.98	13.06	11.2
春小麦	4.38	4.51	4.89	2.8
デュラム小麦	0.66	0.60	0.68	-9.1
小麦計	18.50	20.08	18.63	8.5

資料：USDA「Acreage」(2023.6.30)をもとに農林水産省で作成

図：米国産小麦の輸出量と輸出先国

2023年 (2023年6月)			2022年 (2022年1月～12月)			2021年 (2021年1月～12月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
イエメン	18.0	16.0	メキシコ	376.3	19.0	メキシコ	740.4	17.7
メキシコ	15.9	14.1	フィリピン	228.4	11.5	フィリピン	505.2	12.1
フィリピン	14.9	13.2	日本	212.2	10.7	日本	435.1	10.4
台湾	12.6	11.2	韓国	122.1	6.2	韓国	293.3	7.0
日本	12.1	10.8	ナイジェリア	117.3	5.9	中国	289.9	6.9
韓国	11.6	10.3	台湾	82.1	4.1	ナイジェリア	272.0	6.5
ブラジル	5.7	5.1	イエメン	70.8	3.6	台湾	178.7	4.3
その他	21.7	19.3	その他	775.2	39.1	その他	1,476.6	35.2
計	112.5	100.0	計	1,984.4	100.0	計	4,191.2	100.0

資料：USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」をもとに
農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の生産量は前年度に比べ 4.5%増の 35.3 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.7.21)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、前月予測から 0.4 百万トン下方修正され 35.3 百万トンの見込み。単収は低下するものの、収穫面積の増加から前年度に比べ 4.5%増加する見込み。

種類別の生産量は、普通小麦は単収が低下するものの収穫面積が増加し 29.6 百万トン(前年度比 4.4%増)、デュラム小麦は収穫面積が低下するものの単収が増加し、5.7 百万トン(同 4.6%増)と、それぞれ前年度より増加する見込み。単収は平原三州の大分部(特に、サスカチュワン州、アルバータ州)で高温、乾燥天候の継続から低下する見通し。

なお、カナダ統計局「Principal field crop areas, June 2023」(2023.6.28)によれば、2023/24 年度の小麦全体の播種面積は、前年度より 6.4%増加し 10.9 百万ヘクタールと、ここ 20 年間で最高となる見込み。種類別の播種面積は、春小麦は 7.88 百万ヘクタールと前年度に比べ 8.0%の増加、デュラム小麦は 2.44 百万ヘクタールと同 0.5%の増加、主にカナダ東部で作付けされる冬小麦は 0.57 百万ヘクタールと 20.1%の増加となる見込み。播種面積の増加の要因は、価格が高く小麦の収益性が高いことや、世界からの堅調な需要があることで、オーツ麦等の作付けからシフトした。

播種は、カナダ西部のサスカチュワン州、マニトバ州の一部で降雨過多により 5 年平均よりわずかに遅れた一方、アルバータ州で気温が上昇し乾燥した天候となり、平年より早く 5 月末にほぼ終了。カナダ西部では、乾燥天候により土壌水分量は不足傾向となっており、生育には降雨が必要とされている。

カナダ各州政府によれば、①最大生産州であるサスカチュワン州では、7 月 10 日時点で、作柄評価を示す「優良～良」の割合は、春小麦が 50%、デュラム小麦が 26%と、それぞれ前年度の 74%、58%を下回った。②マニトバ州では、春小麦は開花を終え、作柄評価は概ね「良～並み」である。③アルバータ州では、7 月 11 日時点で、作柄評価を示す「優良～良」の割合は、春小麦が 46%、デュラム小麦が 34%と、降雨があったものの、それぞれ前年度の 83%、64%を大きく下回っている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン下方修正され 24.6 百万トンと、前年度に比べ 0.2%減少の見込み。種類別の輸出量は、普通小麦が、アジア、アフリカからの食用需要や豪州等での生産減、黒海地域からの輸出の不安定さを受け、19.9 百万トンと前年度に比べ 1.0%増加。デュラム小麦は、4.8 百万トンと同 5.0%減少。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)			
			予測値、() はAAFC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	22.4	33.8	35.0	(35.3)	▲ 2.0	3.5
消費量	10.2	10.0	9.1	(9.3)	▲ 0.5	▲ 9.0
うち飼料用	5.2	4.5	4.0	(4.9)	▲ 0.5	▲ 11.1
輸 出 量	15.1	25.5	26.5	(24.6)	▲ 1.0	3.9
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	(0.1)	－	9.1
期末在庫量	3.7	2.5	2.5	(5.1)	▲ 0.5	－
期末在庫率	14.5%	7.2%	7.1%	(15.0%)	▲ 1.1	▲ 0.0

(参考)
収穫面積(百万ha) 9.20 10.08 10.60 (10.72) ー 5.2
単収(t/ha) 2.44 3.35 3.30 (3.30) ▲ 0.19 ▲ 1.5
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 July 2023)

図 品種別カナダ産小麦の播種面積の推移

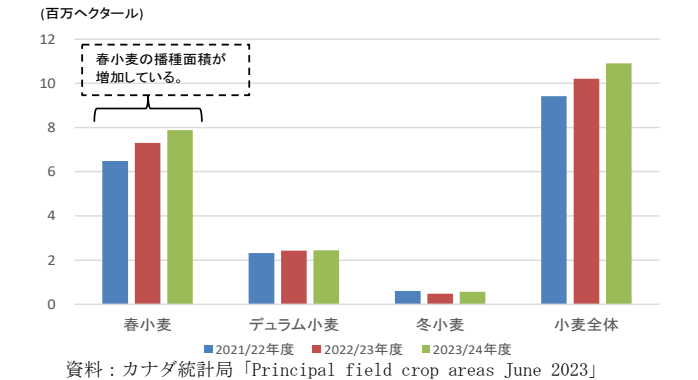


表 カナダ産小麦の輸出量、輸出先国

(輸出量: 万トン、シェア: %)

2022/23年度 (2023年5月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年5月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年5月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
インドネシア	20.6	13.2	中国	264.8	12.6	日本	144.5	12.4
ペルー	14.3	9.1	インドネシア	175.3	8.3	インドネシア	106.6	9.1
ナイジェリア	11.2	7.2	日本	151.7	7.2	コロンビア	77.2	6.6
日本	10.9	7.0	イタリア	135.3	6.4	ペルー	75.1	6.4
バングラデシュ	10.4	6.6	ペルー	133.0	6.3	中国	69.4	6.0
モロッコ	10.1	6.5	バングラデシュ	132.9	6.3	米国	63.5	5.4
その他	78.9	50.4	その他	1,111.5	52.8	その他	629.7	54.0
計	156.4	100.0	計	2,104.5	100.0	計	1,166.0	100.0

資料：Canadian Grain Commission のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 >2023/24 年度の生産量は前年度比 26.9%減の 29.0 百万トン

【生育・生産状況】】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、29.0 百万トンと前年度に比べ 26.9%減少する見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.6.6)によれば、2023/24 年度の実生産量は、収穫面積の減少(前年度比 1.6%減)と単収の低下(同 32.8%減)から 26.2 百万トンと、史上最高となった前年度を 33.9%、過去 5 年平均(28.0 百万トン)を 6.4%それぞれ下回る見込み。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)の実生産量は、播種面積が前年度から 2 %減少し 4.65 百万ヘクタールとなり、単収も乾燥天候から減少するため、前年度の史上最高の 14.0 百万トンから減少(32%減)するものの、9.5 百万トンと 6 年平均(9.9 百万トン)並みになる見込み。また、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)の実生産量は、乾燥天候による単収の低下と播種面積の減少から、前年度の 10.3 百万トンから減少(前年度比 30%減)するものの、7.2 百万トンと 6 年平均(7.3 百万トン)並みの見込み。

豪州全体の小麦の播種面積は、2023/24 年度後半にエルニーニョ現象等が発生し、降水量が冬、春ともに平均を下回る可能性があるため、比較的乾燥に強い大麦へ作付けがシフトすること等により、12.8 百万ヘクタールと前年度から 2 %減少する見込み。なお、播種は 4 月より開始され、6 月には NSW 州北部とクイーンズランド州 (QL 州)の一部を除き完了している。

生育状況は、6 月の降雨量で土壌水分が供給されたため、ほとんどの生産地で小麦は順調に定着した。

GIWA(西豪州穀物産業協会)(2023.7.13)によれば、WA 州の播種面積は前月予測(4.63 百万ヘクタール)から上方修正され 4.73 百万ヘクタール。小麦の播種面積は、前年度同時期(4.81 百万ヘクタール)に比べ 1.7%減の見込み。生産量は 9.9 百万トンと前年度(10.2 百万トン)に比べ、2.9%減少する見込み。乾燥傾向がある中、6 月初旬に降雨があったものの、7 月、8 月の降雨が必要とされている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、アジア市場からの堅調な需要から、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、21.5 百万トンとなるものの、前年度に比べ 33.8%減少の見込み。

また、2022/23 年度の実輸出量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 32.5 百万トンの見込み。同年度の豪州産小麦は飼料用グレードの実生産割合が増加しており、特に飼料用途の小麦が中国向けに輸出されている。2023 年 5 月の輸出量は 333.0 万トンと前年度同期を 17.0%上回った。輸出先国は、中国(23.9%)、ベトナム(13.7%)、インドネシア(12.3%)の順。

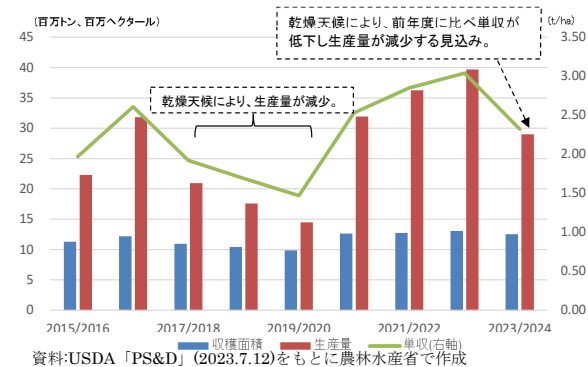
小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10月～24年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.2	39.7	29.0 (27.9)	-	▲ 26.9
消 費 量	8.5	8.0	7.7 (8.2)	▲ 0.3	▲ 3.8
うち飼料用	5.0	4.5	4.2 (4.5)	▲ 0.3	▲ 6.7
輸 出 量	27.5	32.5	21.5 (21.0)	0.5	▲ 33.8
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	2.8	2.8 (1.7)	▲ 0.5	-
期末在庫率	9.6%	7.0%	9.7% (6.0%)	▲ 1.8	2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.50 (12.4)	-	▲ 4.2
単収(t/ha)	2.85	3.04	2.32 (2.25)	-	▲ 23.7

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」(29 June 2023)

図：豪州の実生産量、面積、単収の推移



図：豪州産小麦の輸出量と輸出先国

2023年5月			2023年1月～2023年5月			2022年1月～2022年5月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	79.5	23.9	中国	456.6	27.8	中国	261.4	20.5
ベトナム	45.7	13.7	インドネシア	179.3	10.9	インドネシア	156.2	12.2
インドネシア	41.0	12.3	ベトナム	161.9	9.9	フィリピン	148.3	11.6
韓国	37.3	11.2	韓国	147.6	9.0	ベトナム	136.7	10.7
フィリピン	23.4	7.0	タイ	131.1	8.0	韓国	87.2	6.8
タイ	20.0	6.0	フィリピン	126.2	7.7	マレーシア	51.9	4.1
その他	86.1	25.9	その他	439.8	26.8	その他	434.7	34.1
計	333.0	100.0	計	1,642.5	100.0	計	1,276.4	100.0

資料:豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 東欧5か国：ウクライナ産小麦の輸入規制の延長を検討

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.6.30)によれば、2023/24年度のEU27の生産量は、前月予測から2.9百万トン下方修正され137.2百万トンとなるものの、前年度に比べ2.4%増加の見込み。そのうち、普通小麦は前月予測から2.7百万トン下方修正され129.9百万トンとなるものの、前年度に比べ2.5%増加。デュラム小麦は前月予測から0.2百万トン下方修正され7.3百万トンとなるものの、同1.8%増加する見込み。種類別では、普通小麦はドイツ等で上方修正されたものの、ポーランド等で下方修正された。デュラム小麦はギリシャでわずかに上方修正されたものの、イタリア等で下方修正された。

なお、フランスアグリメールによれば、フランス産の生育状況の評価を示す「とても良い～良い」の割合は、7月10日時点で、普通小麦は81%と前月の88%より低下したものの、前年度同期68%を上回った。デュラム小麦は68%と前月の82%を下回ったものの、前年度同期55%を上回った。

また、収穫進捗率は、冬小麦が33%と前年度同期の45%を下回ったものの、過去5年平均の26%を上回っており、デュラム小麦は65%と前年度78%を下回ったものの、過去5年平均の54%を上回った。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、小麦や他の飼料用穀物の増産から7.0百万トンと、前年度に比べ41.7%減少の見込み。なお、2022/23年度の輸入量は12.0百万トンと、減産となったとうもろこしの代替として増加。特にウクライナ産が増加。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、38.5百万トンと、前年度に比べ13.2%増加する見込み。一方、2022/23年度の輸出量は、前月予測から0.5百万トン下方修正され、34.0百万トンの見込み。なお、フランス産小麦は、干ばつに見舞われたスペイン等への輸出が増加したものの、輸出が好調なロシア産小麦との競合によりEU域外への輸出は減少した。

欧州委員会によれば、2023年4月の輸出量は266.6万トンと前月に比べ増加したものの、5年平均(272.6万トン)を下回っている。輸出先国は、アフリカ、中東諸国が多く、普通小麦はモロッコ(18.2%)、アルジェリア(12.8%)の順で、デュラム小麦はチュニジア(53.7%)、トルコ(15.5%)の順。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023年4月28日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子のトランジットを除く輸入禁止を決定。その後、2023年9月15日までに規制を段階的に廃止することを決定したものの、延長が検討されている。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	138.2	134.3	138.0 (136.1)	▲ 2.5	2.7
消費量	108.3	108.0	109.5 (107.5)	-	1.4
うち飼料用	45.0	44.0	45.0 (43.0)	-	2.3
輸出量	32.0	34.0	38.5 (36.2)	-	13.2
輸入量	4.6	12.0	7.0 (5.9)	-	▲ 41.7
期末在庫量	13.3	17.7	14.7 (16.4)	▲ 1.5	▲ 17.0
期末在庫率	9.5%	12.4%	9.9% (11.4%)	▲ 1.0	▲ 2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.28	24.35	24.35 (24.10)	▲ 0.08	-
単収(t/ha)	5.69	5.52	5.67 (5.65)	▲ 0.08	2.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」(29 June 2023)

写真：ドイツ、フランスの小麦の圃場（7月）

ドイツ バイエルン州ヘルガーツハウゼン近郊(2023.7.1)



本圃場では、6月は例年と比較して降雨量が極端に少なく、小麦の生長は良くなく、葉の黄化も進んだ。乾燥と高温の影響で、今年の収穫時期は7月下旬に早まる見込みで、例年と比較して、収量・質ともに低くなると予想されている。

フランス マニー・アン・ヴクサン近郊(2023.7.12)



本圃場では、小麦は順調に生長している。7月8日に雹が降り、本圃場では被害がなかったものの、近隣には被害を受けた農家もある模様。7月27日～31日頃に収穫を予定している。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の消費量は、飼料用の増加から 2.0 百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月からの変更はなく、史上最高の 140.0 百万トンの見込み。単収と収穫面積の増加から前年度に比べ 1.7%増加した。収穫面積は農薬、肥料代等の生産コスト増も、高価格水準による高い収益性から前年度に比べ増加している。なお、中国の単収は増加傾向にあり、2023/24 年度の単収は 5.93 トン/ヘクタールと約 20 年前の 2000/01 年度 (3.74 トン/ヘクタール)の 1.6 倍に増加している。その要因は、①病害抵抗性や増産性を育種目標とした品種の育成と普及、②生産地域の土壌と気候条件に応じた栽培技術の普及等とみられている。

中国国家気象センター・中国気象農業報道「農業気象月報」(2023.7.5)によれば、6 月 29 日現在、中国全土で冬小麦の収穫はほぼ終了した。なお、5 月下旬に河南省の大部分、陝西省中南部、湖北省で降雨が続き、小麦の一部で穂発芽やカビが発生し小麦の品質が低下するとともに、収穫が遅延した。また、江蘇省の一部では、収穫時の小麦の水分含有量が高くなり、保管状況による品質への影響も懸念されている。一方、春小麦は、主要産地の華北地域や西南地域で開花期から乳熟期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、河南省での収穫期終盤の豪雨による飼料用グレード小麦の増加により飼料用等の消費量が増加することから、前月予測に比べ 2.0 百万トン上方修正され 153.0 百万トンと、前年度に比べ 3.4%増加する見込み。

2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく 12.0 百万トンとなるものの、前年度に比べ 11.1%減少する見込み。特に、製粉用小麦の輸入が増加するとみられている。

2022/23 年度の輸入量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され 13.5 百万トンとなるものの、1992/93 年度以降で最高となる見込み。中国農業農村部によれば、2023 年 5 月の輸入量は 115.4 万トンで、前月比 31.5%減少し、前年同期比 71.4%増加した。2023 年 1 月から 5 月までの間の輸入量は 718.7 万トンと、前年同時期を 62.5%上回っている。この間の輸入先国のシェアは、豪州が 62.7%、カナダが 17.4%、フランスが 10.8%であり、この 3 か国で 90.9%を占めている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 5 月号」によれば、5 月中旬までは、需給が緩み、また、新穀小麦の流通が開始されることから、小麦価格は下落傾向となった。その後、主要生産地の一部の降雨で新穀小麦の品質が懸念され、小麦価格は上昇に転じているものの、普通品質の小麦価格は前年同月比で 16.1%低下、高品質の小麦価格も同 17.1%低下している。

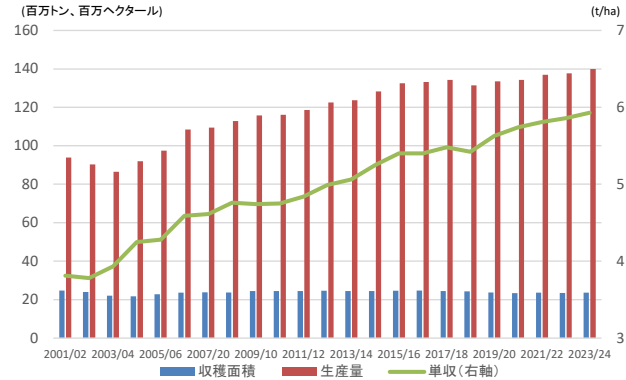
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	137.0	137.7	140.0 (139.0)	-	1.7	
消 費 量	148.0	148.0	153.0 (149.7)	2.0	3.4	
うち飼料用	35.0	33.0	36.0 (32.0)	2.0	9.1	
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.1)	-	▲ 5.3	
輸 入 量	9.6	13.5	12.0 (12.2)	-	▲ 11.1	
期末在庫量	136.8	139.0	137.1 (141.4)	▲ 2.6	▲ 1.4	
期末在庫率	91.9%	93.3%	89.1% (93.8%)	▲ 2.9	▲ 4.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.60 (23.7)	-	0.3	
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.93 (5.86)	-	1.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」(29 June 2023)

図 中国の小麦の生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023.7.12)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量と輸入先国

(輸入量:万トン、シェア%)

2023年5月			2023年1月～2023年5月			2022年1月～2022年5月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	90.7	78.6	豪州	450.5	62.7	豪州	256.8	58.1
カナダ	15.1	13.1	カナダ	125.3	17.4	フランス	144.9	32.8
カザフスタン	7.4	6.4	フランス	77.6	10.8	カナダ	36.9	8.3
ロシア	1.8	1.5	米国	47.5	6.6	カザフスタン	1.5	0.3
その他	0.5	0.4	その他	17.8	2.5	その他	2.1	0.5
計	115.4	100.0	計	718.7	100.0	計	442.3	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 47.5 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、85.0 百万トンの見込み。播種期の降雨過多による収穫面積の減少と単収の低下から、生産量は史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 7.6%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 6.8%上回る見込み。種類別の生産量は、冬小麦は 61.5 百万トンと前年度に比べ 9.6%減少し、春小麦も 23.5 百万トンと同 2.1%減少する見込み。

ロシア気象センターによれば、生育状況は、①ヨーロッパ部北部の中央連邦管区等では、冬小麦が開花期から黄熟期、春小麦が出穂期となるも、一部地域で降雨不足となり、春小麦に葉枯れの影響が出ている。②同南部の南連邦管区等では、冬小麦が黄熟期から完熟期に入り、一部で収穫が開始された。春小麦は概ね乳熟期に入った。③アジア部のウラル連邦管区等では、冬小麦が出穂期から開花期、春小麦が莖たち期を迎え、6 月下旬に降雨があったものの、南部で土壌水分量が不足している。ロシア農業省によれば、7 月 11 日時点までの収穫量は、降雨の影響を受け前年度同期比 41.8%減少の 6.3 百万トン。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 47.5 百万トンと、史上最高であった前年度から更に 4.4%増加の見込み。増加の要因は、①2023/24 年度の実産量は減少するものの、期首在庫と合わせた供給量が 2 年連続で 100 百万トンを超え輸出余力が十分ある。②輸出税の算出方法の改定により世界市場での輸出競争力が高まった。③ロシアの輸出市場であるエジプト、イラン、アルジェリア等からの輸入需要が引き続き堅調であることとみられる。また、2022/23 年度の輸出量は、輸出余力が十分あり価格競争力が高いことから、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 45.5 百万トンと、前年度に比べ 37.9%増加の見込み。

USDA によれば、7 月 7 日時点の輸出価格(FOB)は、好調な輸出等から、6 月 6 日時点の 227 ドル/トンから 235 ドル/トンに上昇したものの、主要小麦輸出国中で最も安価である。また、2023 年 6 月の輸出量は、前月に比べ 13.5%減少するものの、同月の過去 3 年平均(135.3 万トン)を上回る 366.2 万トンと水準は高い。輸出先国は、エジプト(19.4%)、トルコ(17.3%)、バングラディッシュ(4.5%)の順。

2022 年 7 月 22 日に国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者により合意した「黒海穀物イニシアチブ」は、2023 年 7 月 17 日に期限を迎えたが、ロシアが離脱を表明し、履行が停止された。ロシアは、国連と結んだメモランダムにおける輸出への障害の除去が履行され次第、復帰するとした。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

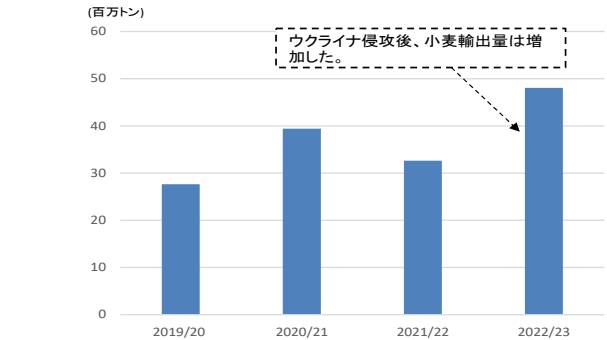
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	75.2	92.0	85.0 (83.6)	-	▲ 7.6
消 費 量	41.8	42.3	42.0 (45.1)	-	▲ 0.6
うち飼料用	18.5	19.0	19.0 (20.0)	-	-
輸 出 量	33.0	45.5	47.5 (44.7)	1.0	4.4
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	12.1	16.6	12.4 (10.6)	▲ 2.0	▲ 25.2
期末在庫率	16.2%	19.0%	13.9% (11.8%)	▲ 2.4	▲ 5.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	27.50 (27.8)	-	▲ 5.2
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.09 (3.01)	-	▲ 2.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」(29 June 2023)

図：ロシアの小麦輸出量の推移(2019/20～2022/23)



資料：USDA 「PS&D」(2023.7.12)のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年6月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	71.1	19.4	エジプト	836.8	17.4	トルコ	712.0	21.8
トルコ	63.4	17.3	トルコ	682.1	14.2	イラン	586.7	18.0
バングラディッシュ	16.7	4.6	バングラディッシュ	199.2	4.1	エジプト	504.0	15.4
カザフスタン	15.2	4.2	パキスタン	155.2	3.2	カザフスタン	217.3	6.7
ブラジル	14.7	4.0	イラン	149.6	3.1	サウジアラビア	97.3	3.0
サウジアラビア	13.3	3.6	アゼルバイジャン	136.9	2.8	アゼルバイジャン	95.9	2.9
UAE	12.6	3.4	カザフスタン	125.5	2.6	スーダン	71.2	2.2
その他	159.2	43.5	その他	2,521.5	52.5	その他	979.4	30.0
計	366.2	100.0	計	4,806.8	100.0	計	3,263.8	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の輸出量は 10.5 百万トンと前年度比 37.5%減少

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく17.5百万トンと、ロシアによる侵攻の影響を受け2013/14年度以降で最低となる見込み。また、前年度(21.5百万トン)に比べ18.6%減、過去5年平均(26.8百万トン)に比べ34.8%減の見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、7月13日現在、冬小麦は0.21百万ヘクタール(前年度0.59百万ヘクタール)での収穫が終了し、前年度同期に比べ54.1%少ない0.8百万トンの収穫に留まっている。

なお、ウクライナ穀物協会の試算によれば、7月5日時点で、2023/24年度の前年度(20.2百万トン)から11.4%減少の17.9百万トンの見込み。この生産量は国内需要を満たすには十分に食料安全保障上の問題はないが、輸出余力が低下するため、輸出量は15.0百万トンに留まる見込み。

【貿易状況・その他】USDA 7月予測(2023.7.12)によれば、2023/24年度の輸出量(「黒海穀物イニシアチブ」と陸路、EUの港湾を利用した「連帯レーン」)は、前月予測からの変更はなく10.5百万トン。また、前年度に比べると、生産減による輸出余力の低下、ロシアの侵攻による港湾の閉鎖、今後の黒海穀物イニシアチブの先行きの不透明性から、37.5%減少する見込み。また、2022/23年度の輸出量は、前月予測から0.8百万トン上方修正され16.8百万トンと、2021/22 年度に比べ10.6%の減少に留まった。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度の輸出量は1,690.0万トン(海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる)。また、輸出先国は、トルコ(21.7%)、ルーマニア(15.7%)、スペイン(15.1%)の順。USDAによれば、ロシアのウクライナ侵攻中の輸出先は、輸出の容易さや、干ばつによるEU諸国の一部の需要により、侵攻前のアジア、北アフリカから欧州向けに大きくシフトした。また、「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく6月の輸出量は48.5万トンで、前月に比べ、35.5%増加した(2022年8月からの月平均は80.7万トン)。なお、輸入関税を賦課されたトルコ向けは5月には2.6万トンに減少したものの、6月は9.5万トンに増加した(関税賦課前のトルコ向け月平均15.8万トン)。また、2022年8月から2023年6月までの黒海港湾からの小麦輸出量は887.2万トンで、輸出先国は、スペイン(25.9%)、トルコ(17.3%)、バングラディシュ(12.0%)の順。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者による「黒海穀物イニシアチブ」は、2023年7月17日にロシアが離脱を表明し、履行が停止された。また、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入による東欧5か国のトランジットを除く輸入禁止は、期限が9月15日から延長される可能性がある。

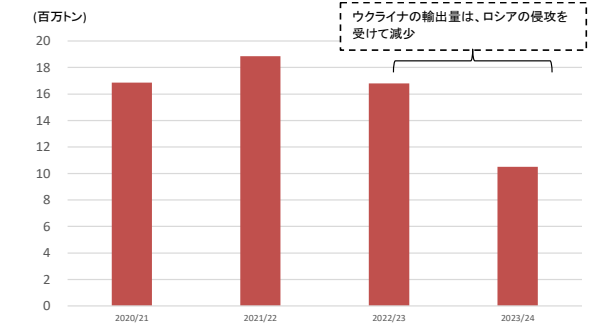
小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	33.0	21.5	17.5 (22.5)	-	▲ 18.6
消 費 量	10.5	8.4	7.1 (11.9)	-	▲ 15.5
うち飼料用	4.5	3.4	2.5 (2.7)	-	▲ 26.5
輸 出 量	18.8	16.8	10.5 (11.5)	-	▲ 37.5
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	5.3	1.6	1.6 (2.0)	▲ 0.1	▲ 2.5
期末在庫率	18.0%	6.5%	9.0% (8.4%)	▲ 0.6	2.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	4.30 (5.7)	-	▲ 23.2
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.07 (3.57)	-	6.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」(29 June 2023)

図: ウクライナ産小麦の生産量、輸入量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2023.7.12))をもとに農林水産省で作成

表: ウクライナ産小麦の輸出量、輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2022/23年度 (2023年6月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月※)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	32.6	23.5	トルコ	367.1	21.7	エジプト	273.8	15.1
エジプト	23.8	17.2	ルーマニア	264.6	15.7	インドネシア	265.5	14.7
スペイン	21.2	15.3	スペイン	255.7	15.1	トルコ	178.7	9.9
ルーマニア	15.6	11.3	バングラディシュ	108.7	6.4	パキスタン	146.9	8.1
バングラディシュ	10.4	7.5	ポーランド	87.6	5.2	サウジアラビア	75.1	4.1
インドネシア	7.3	5.3	エジプト	85.6	5.1	イエメン	64.7	3.6
レバノン	4.6	3.3	イタリア	59.4	3.5	バングラディシュ	63.2	3.5
その他	23.0	16.6	その他	461.3	27.3	その他	743.4	41.0
計	138.5	100.0	計	1,690.0	100.0	計	1,811.3	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2022年3月から2022年6月までの輸出データはロシアのウクライナ侵攻により不明

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU で下方修正されたものの、米国、カナダ、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

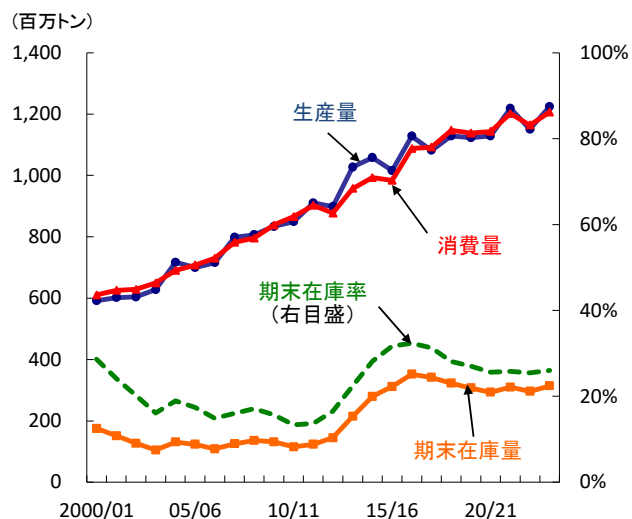
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・カナダ、EU で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



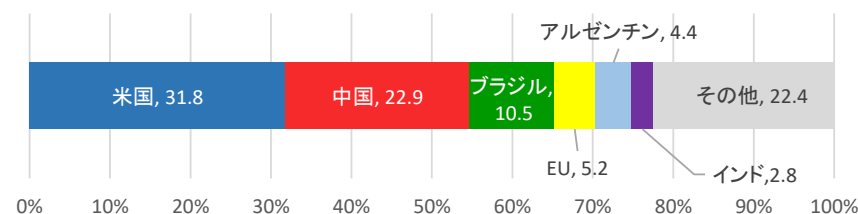
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

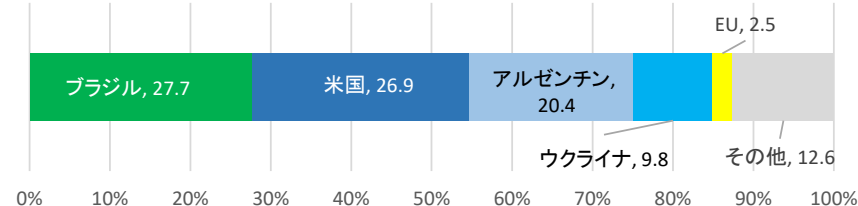
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,218.7	1,150.7	1,224.5	1.7	6.4
消費量	1,201.9	1,164.3	1,206.7	0.3	3.6
うち飼料用	745.9	732.4	762.1	1.3	4.0
輸出量	206.5	176.6	198.3	0.5	12.3
輸入量	184.5	175.1	188.4	1.4	7.6
期末在庫量	309.9	296.3	314.1	0.1	6.0
期末在庫率	25.8%	25.4%	26.0%	0.0	0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 July 2023)

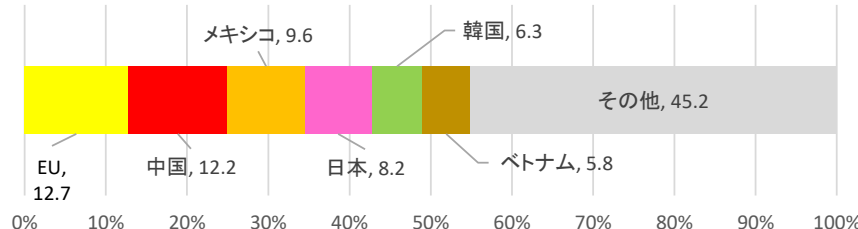
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,224.5 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(198.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(188.4 百万トン) (単位：%)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 作付面積の増加により、生産量は1.4百万トン上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、作付面積報告「Acreage」（2023.6.30）において作付面積が増加したことを受け前月予測から1.4百万トン上方修正され、前年度より11.6%増の389.2百万トンと史上最高の見通し。作付けが大豆からとうもろこしへシフトしたことが主な要因とみられる。また、単収は、7月に降雨があったものの、6月の高温乾燥を受けて前月予測から下方修正された。

USDA「Crop Progress」（2023.7.17）によれば、7月16日現在で主要18州におけるシルキング進捗率は47%で、前年同時期（34%）、過去5年平均（43%）をいずれも上回っている。作柄評価が「良～やや良」の比率は57%であり、7月上旬に降雨があり前週（55%）から引き上げられたものの、前年同時期（64%）を下回っている。現在受粉期を迎えているが、高温乾燥による影響への注意が必要。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ2.5%増の314.6百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴う国際的なとうもろこし価格の低下を受けた輸出の回復期待から、前年度より27.3%増の53.3百万トンの見込み。2023/24年度の世界最大の輸入国になると見込まれる中国への輸出をめぐり、ブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.7.12）によれば、本年7月の米国産の輸出価格は、作付面積報告での面積が予想を上回ったことや、中西部における7月上旬の降雨により、前月から低下した。また、2023年輸出量（1月1日～6月30日）は23.8百万トンで、内訳はメキシコ（7.7百万トン）、日本（5.1百万トン）、中国（3.8百万トン）の順。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、2023/24年の生産量が上方修正されたため、前月予測から0.1百万トン上方修正され、前年度より61.4%増の57.5百万トンの見込み。期末在庫率は15.6%で、前年度より上昇し、2018/19年度（15.5%）以来の高水準となる見込み。

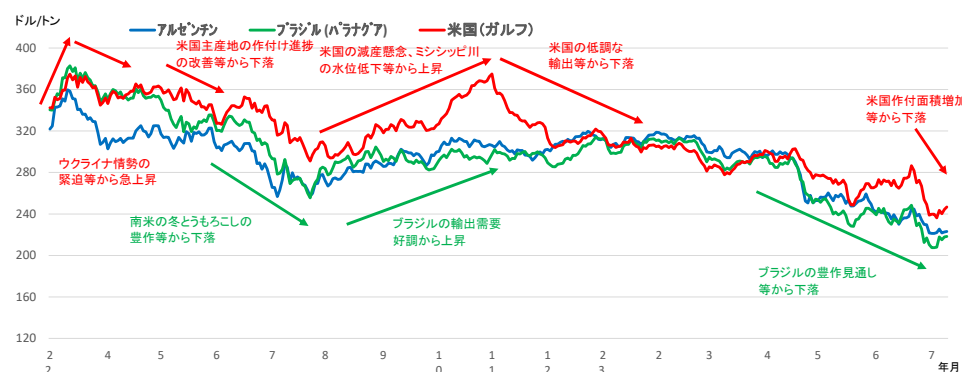
とうもろこしー米国

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	382.9	348.8	389.2	1.4	11.6
消 費 量	317.1	306.9	314.6	-	2.5
うち飼料用	145.3	137.8	143.5	-	4.2
エタノール用等	135.3	132.7	134.6	-	1.4
輸 出 量	62.8	41.9	53.3	-	27.3
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	35.0	35.6	57.5	0.1	61.4
期末在庫率	9.2%	10.2%	15.6%	0.0	5.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	34.53	32.05	34.93	0.90	9.0
単収(t/ha)	11.09	10.88	11.14	▲ 0.25	2.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)

図: 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料: IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2022/23 年度の冬とうもろこしの収穫に遅れ

【生育・生産状況】USDAによれば、本年9月以降に作付けが開始される2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より3.0%減の129.0百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.7.13）によれば、収穫終盤の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比9.3%増の27.4百万トンの見込み。大豆収穫後の2月以降に作付けされ、収穫期を迎えている冬とうもろこしの生産量は、前年度比14.0%増の100.4百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比12.9%増の127.8百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

USDAによれば、2022/23年度の夏とうもろこしの収穫進捗率は95%であり、収穫が完了していた前年度同時期より遅れているものの、収穫作業は終盤を迎えている。

冬とうもろこしについては、USDAによれば、主要生産州であるマツト・グロッソ州、パラナ州では5月下旬から6月にかけて降雨に恵まれ、作柄は良い。他方で、7月14日現在、マツト・グロッソ州の収穫進捗率は68%と、前年度同期（85%）を下回っている。現地情報によると、降雨後に粒が完全に乾燥するのを待つ必要があり、収穫進捗率が低くなっている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、加工用、飼料用の需要増加等から、前年度より3.4%増の76.5百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より減少するものの、引き続き高水準の生産量と競争力のある安価な輸出価格から、前年度より1.8%減の55.0百万トンとなり、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み（右図参照）。米国産は生産量の15%程度が輸出向けで大半は国内市場に振り向けられる一方、ブラジル産は40%程度が輸出向けとなり、潤沢な輸出余力により輸出競争力があることが要因とされている。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～6月の輸出量は11.6百万トンで、前年度比84%増。内訳は、日本（1.9百万トン）、中国（1.3百万トン）、韓国（1.2百万トン）の順。前年11月末以降開始された中国向け輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てくる本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け本格化の見通し。

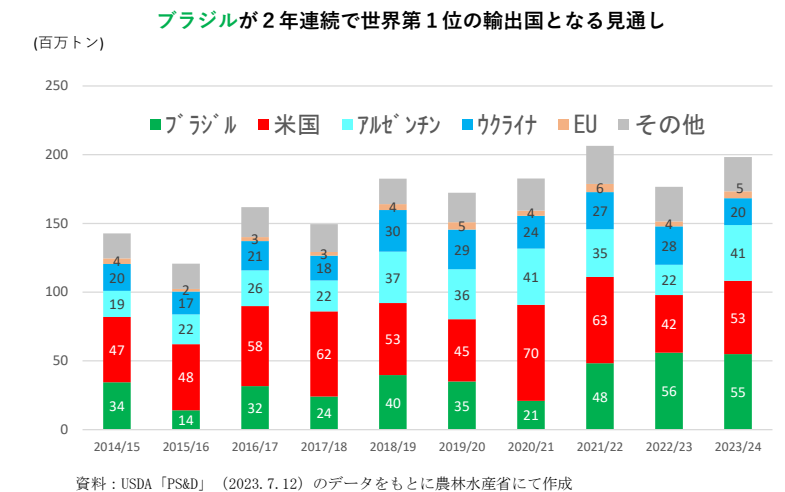
とうもろこし－ブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	116.0	133.0	129.0 (130.2)	－	▲ 3.0
消 費 量	70.5	74.0	76.5 (79.2)	－	3.4
うち飼料用	59.5	61.5	62.5 (54.3)	－	1.6
輸 出 量	48.3	56.0	55.0 (51.0)	－	▲ 1.8
輸 入 量	2.6	1.0	1.2 (0.5)	－	20.0
期末在庫量	4.0	8.0	6.7 (10.6)	－	▲ 16.3
期末在庫率	3.3%	6.1%	5.1% (8.1%)	－	▲ 1.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	21.80	22.90	22.90 (22.30)	－	－
単収(t/ha)	5.32	5.91	5.63 (5.84)	－	▲ 4.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から大きく回復する見通しから、58.8%増の 54.0 百万トンで史上最高となる見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.7.20）によれば、2022/23 年度の実収進捗率は 66.1%と例年より遅れている。生産量は、ブエノスアイレス州等主産地で長引く乾燥の影響で 34.0 百万トンとなり、2021/22 年度（52.0 百万トン）を 35%下回る見込み。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 12.5%増の 13.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、輸出量も回復する見通しから、前年度より 84.1%増の 40.5 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～5 月の輸出量は 8.2 百万トンで、2022/23 年度産が減産となった影響もあり、前年度同期比（14.8 百万トン）で 45%減。輸出先の内訳は、アルジェリア（103.0 万トン）、マレーシア（93.3 万トン）、ペルー（91.1 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 7 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	49.5	34.0	54.0 (61.0)	-	58.8	
消 費 量	14.5	12.0	13.5 (20.4)	-	12.5	
うち飼料用	10.5	8.0	9.3 (15.5)	-	16.3	
輸 出 量	34.7	22.0	40.5 (40.9)	-	84.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	-	-	
期末在庫量	1.5	1.5	1.5 (4.8)	-	-	
期末在庫率	3.0%	4.4%	2.8% (7.8%)	-	▲ 1.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.00 (8.20)	-	4.5	
単収(t/ha)	6.97	5.07	7.71 (7.44)	-	52.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June 2023)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの圃場風景 (7月2日撮影)

本圃場では成熟期を迎えており、予想単収は 6.5 トン/ヘクタールの見込み。



< 中国 > 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、大豆の増産政策により作付けがとうもろこしから大豆にシフトし作付面積がわずかに減少するものの、主産地における単収の増加を受け、前年度より 1.0%増の 280.0 百万トンで史上最高の見込み。

春とうもろこしは、6 月上旬現在、主産地の黒竜江省等で三葉期から節間伸長期を迎えている。降雨は当初少なかったが、6 月から 7 月にかけての降雨と 6 月中旬の生育に適した気温により、平年と比べ概ね順調に生育しているとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下と国内の経済成長を背景とした飼料用需要の増加から、前年度より 1.7%増の 304.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国際価格が国内価格を下回っていることを受け、特に、前年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より 27.8%増の 23.0 百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1 月～5 月計の実輸入量は、前年同期より 10.6%減の 1,018 万 6 千トン。内訳は、ウクライナ（376.8 万トン）、米国（346.7 万トン）、ブラジル（221.5 万トン）の順。2023 年 4 月以降、米国産の実輸入量が前年同月より大きく減少しており、背景として、米国産が他国産に比べて割高であることから輸入を取り止め、安価なブラジル産とうもろこしや豪州産小麦を飼料向けに代替する動きがあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 5 月号」によると、5 月の国内価格は、養豚業者の経営マージンの悪化等から買い付けに消極的になったほか、華北地区で小麦の備蓄スペース確保のために売りに出されたことにより、2,720 元/トンと前月（2,880 元/トン）から下落した。また、5 月の輸入価格は、2,500 元/トンと前月（2,700 元/トン）から下落した。2022 年 12 月以降、国内価格が国際価格より高い状況が続いている。

とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	272.6	277.2	280.0	(279.4)	-	1.0
消 費 量	291.0	299.0	304.0	(305.5)	-	1.7
うち飼料用	209.0	218.0	223.0	(205.0)	-	2.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.0	23.0	(20.0)	-	27.8
期末在庫量	209.1	205.3	204.3	(169.9)	-	▲ 0.5
期末在庫率	71.9%	68.7%	67.2%	(55.6%)	-	▲ 1.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00	(43.00)	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.51	(6.50)	-	1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2023年5月			2023年1月～2023年5月			2022年1月～2022年5月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ウクライナ	86.6	52.1	ウクライナ	376.8	37.0	米国	637.0	55.9
米国	56.8	34.2	米国	346.7	34.0	ウクライナ	482.4	42.4
南アフリカ	10.8	6.5	ブラジル	221.5	21.7	ブルガリア	8.6	0.8
ブルガリア	9.8	5.9	ブルガリア	24.5	2.4	ミャンマー	5.3	0.5
ロシア	1.6	1.0	ロシア	19.9	2.0	ロシア	2.7	0.2
ミャンマー	0.6	0.3	ミャンマー	17.1	1.7	ラオス	2.3	0.2
その他	0.1	0.0	その他	1.2	1.1	その他	0.2	0.0
計	166.3	100	計	1018.6	100	計	1138.8	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ウクライナ > 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 40.6%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、ロシアによる侵攻の影響で収穫面積及び単収いずれも減少することから、前年度より 7.4%減、侵攻前の 2021/22 年度より 40.6%減の 25.0 百万トンと、2012 年以来最低の水準となる見込み。なお、ウクライナ政府発表の作付け進捗データに基づき収穫面積が 0.1 百万ヘクタール上方修正され 3.9 百万ヘクタールとなったことから、生産量は前月予測から 0.5 百万トン上方修正された。

ウクライナ農業政策食料省によれば、6 月 22 日時点での 2023/24 年度の播種済面積は前年度より 12.9%減の 4.04 百万ヘクタールで、播種は完了。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 5.8%増の 5.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の上方修正を受けて前月予測から 0.5 百万トン上方修正されたものの、供給量の減少及び主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 30.4%減の 19.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022 年 10 月から 2023 年 6 月までの間の輸出量は 2,444 万トン（海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる）。輸出先国は、中国（547 万トン）、ルーマニア（378 万トン）、スペイン（274 万トン）、エジプト（185 万トン）、イタリア（172 万トン）の順。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された 2022 年 8 月 1 日から 2023 年 6 月 30 日までの間の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,672 万トン。主な輸出先は、中国（540 万トン）、スペイン（328 万トン）、イタリア（145 万トン）の順。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者による黒海穀物イニシアチブは、2023 年 7 月 17 日、ロシアが離脱を表明し履行が停止された。

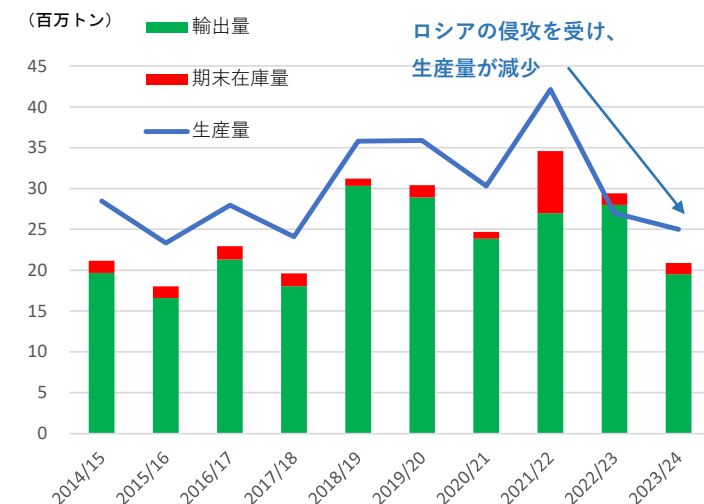
なお、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023 年 4 月 28 日、ポーランド、スロバキア、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子の輸入の禁止（トランジットを除く）を決定。2023 年 9 月 15 日までに段階的に規制を廃止することを決定されたものの、延長が検討されている。

とうもろこしーウクライナ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	42.1	27.0	25.0 (24.0)	0.5	▲ 7.4
消 費 量	8.4	5.2	5.5 (6.3)	-	5.8
うち飼料用	7.2	4.0	4.5 (4.5)	-	12.5
輸 出 量	27.0	28.0	19.5 (18.0)	0.5	▲ 30.4
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	7.6	1.4	1.4 (1.0)	-	-
期末在庫率	21.5%	4.2%	5.6% (4.3%)	▲ 0.1	1.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	3.90 (3.20)	0.10	▲ 3.7
単収(t/ha)	7.68	6.67	6.41 (7.50)	▲ 0.04	▲ 3.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」(29 June 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

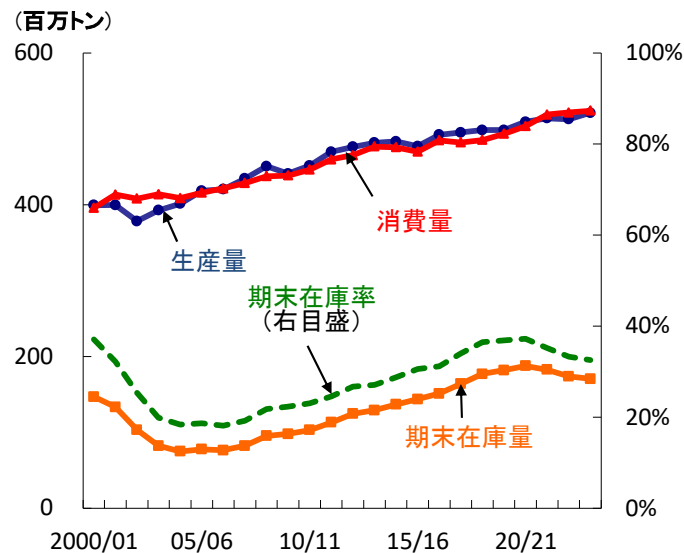


資料：USDA 「PS&D」 (2023. 7. 12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>		2023/24 年度	
生産量	前年度比 ↑	前月比 ↑	
・米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。			
消費量	前年度比 ↑	前月比 ↑	
・タイ等で下方修正も、ベトナム、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。			
輸出量	前年度比 ↑	前月比 ↑	
・ベトナム、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。			
期末在庫量	前年度比 ↓	前月比 ↑	



資料：USDA「PS&D」（2023.7.12）をもとに農林水産省にて作成

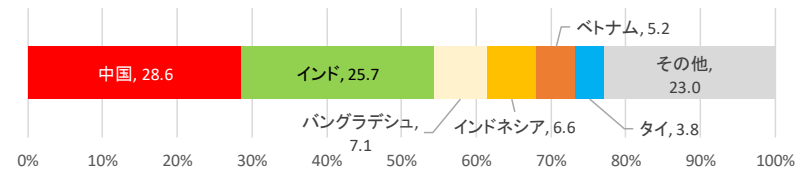
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

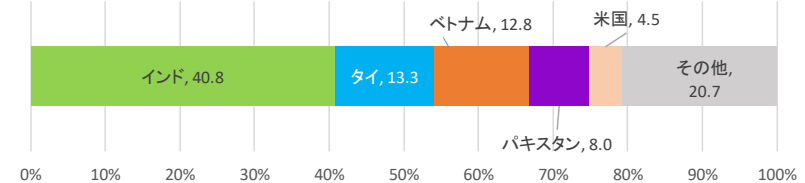
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.7	512.5	520.8	0.3	1.6
消 費 量	518.6	521.4	523.9	0.1	0.5
輸 出 量	56.9	55.6	56.4	0.6	1.5
輸 入 量	54.7	54.5	54.2	0.7	▲ 0.7
期末在庫量	182.4	173.6	170.4	0.2	▲ 1.8
期末在庫率	35.2%	33.3%	32.5%	0.0	▲ 0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 July, 2023）

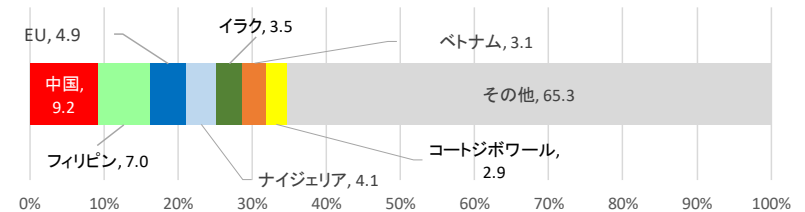
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(520.8百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(56.4百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(54.2百万トン) (単位：%)



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の収穫面積は前年度より 21.6%増

【生育・生産動向】米国農務省（USDA）の「作付面積報告（Acreage）」（2023.6.30）によれば、本年度の収穫面積は前年度比 21.6%増加し 107.0 万ヘクタールとなる見込み。2023/24 年度の生産量も、前月予測から 0.3%上方修正され、前年度比 25.3%増の 6.4 百万トンとなる見込み。

このうち、長粒種の収穫面積は、降雨過多で作付けが阻害された前年度と異なり、平年並みの天候だったことから、前年度比 10.7%増加し 79.5 万ヘクタールの見通し。また、深刻な干ばつで 2 年連続作付面積が減少した中・短粒種の収穫面積は、前年度比 71.1%増加して 27.6 万ヘクタールの見込み。長粒種よりも単収が高い中・短粒種の収量増加により、全体の単収も高くなる見込み。

同「Crop Progress」（2023.7.17）によれば、7 月 16 日時点で主要生産 6 州の出穂率は 36%と、前年同期（27%）、過去 5 年平均（29%）を上回っている。7 月上旬にはルイジアナ州（出穂率 72%）で収穫が開始され、また、テキサス州でも、7 月下旬から収穫が開始される見込み。主要生産 6 州の作柄評価は「良～やや良」が 73%と、前年同期（72%）とほぼ同水準。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、生産量の増加見通しから、前月予測からわずかに上方修正され、前年度比 3.4%増の 4.9 百万トンと、史上最高の見込み。増産による国内供給量増加で国内取引価格が下落していることも背景にある。

2023/24 年度の輸入量は、前月予測からわずかに下方修正され、国内での生産量増加に伴う中・短粒種の輸入減少から、前年度比 0.8%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、特に中・短粒種の生産量増加と、それに伴う米国産米の価格の低下見通しから、前月予測から 0.2%上方修正され、前年度比 27.0%増の 2.5 百万トンの見込み。

USDA「Rice Outlook」（2023.7.14）によれば、7 月 11 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、砕米 4 %混入）の価格は 760 ドル/トンと、本年 1 月末以降、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。地中海向けカリフォルニア米（1 等、砕米 4 %混入）である中粒種の価格は 1,650 ドル/トンと、前年 12 月末以降で最高の価格水準となっている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

（単位：百万精米トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	6.4	0.3	25.3
消 費 量	4.8	4.8	4.9	0.0	3.4
輸 出 量	2.7	2.0	2.5	0.2	27.0
輸 入 量	1.2	1.2	1.2	▲ 0.0	▲ 0.8
期末在庫量	1.3	0.8	0.9	▲ 0.0	16.0
期末在庫率	17.0%	12.0%	12.6%	▲ 0.7	0.6

（参考）

収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.07	0.04	21.6
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.52	0.02	2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July, 2023)

写真：アーカンソー州の生育状況の風景(6月 28 日撮影)。現在、節間伸長期にある。



< インド > 2023年7月20日よりバスマティ米以外の輸出を禁止

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、史上最高であった前年度の収穫面積が減少する（前年度比 1.5%減）との予想から、前年度比 1.5%減の134.0 百万トンの見込み。単収は、史上最高だった前年度と同水準の見込み。

本年の南西モンスーンの開始は過去4年間で最も遅く、1週間以上遅れて6月8日となった。北東部の産地は例年通りの降雨があったものの、他地域では十分な降雨にならず作付けが遅れていた。6月下旬からは例年通りの降雨となり、北東部では豪雨も発生した。7月に入り、更に降雨量が増加したものの、東部の雨季米の産地では6月1日以降、土壌水分不足が続いている。

インド農業農民福祉省によると、カリフ米作付済み面積は、7月14日時点で12.3百万ヘクタールと、前年同期（13.1百万ヘクタール）に比べ0.8百万ヘクタール少ない状況。作付け進捗率は30.8%と、前年度の32.9%より遅れている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度比1.3%増の114.0百万トンと史上最高の見込み。前年度に引き続き、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約8億人が対象）向けにコメが供給される見込み（2022年4月～2023年3月は65百万トン）。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、依然としてタイ・ベトナム等他の主要輸出国と比べて最も価格競争力があることから、前年度比2.2%増の23.0百万トンと史上最高となり、世界第1位の輸出国として、世界の輸出量の41%を占める見込み。

インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制する観点から、前年9月9日に輸出規制を発動（砕米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））したが、更なる国内価格抑制と国内の供給量確保のため、7月20日にバスマティ米以外の精米の輸出を禁止した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.7.12）によれば、インド産米（砕米5%混入）の7月11日までの週の輸出価格は470ドル/トンと、前月から15ドル/トン上昇したものの、アジア主要輸出国の中で依然として最低の価格水準（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度比8.6%減の32.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	129.5	136.0	134.0 (135.0)	-	▲ 1.5
消 費 量	110.5	112.5	114.0 (113.7)	-	1.3
輸 出 量	22.0	22.5	23.0 (22.2)	-	2.2
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	34.0	35.0	32.0 (30.1)	-	▲ 8.6
期末在庫率	25.7%	25.9%	23.4% (22.2%)	-	▲ 2.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	46.28	47.70	47.00 (47.00)	-	▲ 1.5
単収(もみt/ha)	4.20	4.28	4.28 (2.88)	-	-

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 July, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (29 June, 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ輸出量と輸先国(2022年4月～2023年3月)

（単位：万トン）
※年度は2022年4月～2023年3月

品 種 別	2022/23	シェア
非バスマティ米	1778.6	79.6%
バスマティ米	455.9	20.4%
合計	2234.5	100.0%

非バスマティ米 輸出先国	2022/23	シェア	バスマティ米 輸出先国	2022/23	シェア
1 ベナン	155.8	8.8%	1 イラン	99.9	21.9%
2 中国	150.4	8.5%	2 サウジアラビア	95.4	20.9%
3 セネガル	133.3	7.5%	3 イラク	36.4	8.0%
4 コートジボワール	121.1	6.8%	4 アラブ首長国連邦	31.5	6.9%
5 トーゴ	94.0	5.3%	5 イエメン	29.0	6.4%
合計	1778.6	100.0%	合計	455.9	100.0%

資料：「agriXchange」をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 一期作稲、及び南部の二期作早稲の生育は順調

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比2.1%増の149.0百万トンと、史上最高となる見込み。なお東北部では、政府の大豆作付け推進政策により、コメの作付面積が減少傾向にある。

中国中央气象台（2023.7.10）によれば、一期作稲は、東北地区、長江流域の大部分で分げつ期から節間伸長期に、一部では緑化期に入っており、また、西南地区は分げつ期から節間伸長期に、一部地域では穂ばらみ期や出穂期に入っている。生育状況は、ほとんどの地域で通常通りかやや早い状況。二期早生稲は、華南の大部分で主に乳熟期と成熟期に差し掛かっており、長江流域の大部分は出穂期から乳熟期に入っている。ほとんどの稲の生育状況は平年並みか3～7日早く、順調に成長している。二期晩生稲は、華南の一部の地域で三葉期に入っているが、大部分の地域では播種から出芽期に入っている。長江流域のほとんどの地域は三葉期に入り、部分的に播種から出芽期となっている。ほとんどの地域で生育状況は通常またはやや早く、順調である。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこしの増産見込みによる飼料用米の消費量の減少から、前年度比1.9%減の152.0百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、前月予測から変更はないものの、2023年5月のインド、パキスタン、タイからの輸入量が予想よりも少なかったことから、2022/23年度の輸入量が下方修正されたものの、前年度比8.7%増の5.0百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2023年5月の輸入量は27.7万トン（前年同期比57.9%減）、1～5月の輸入量は163.7万トン（前年同期比43.6%減）となった。

なお、中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により減少している。

中国外交部によれば、4月14日にブラジル農業畜産省と中国税関総署が、コメを含むブラジル産農産物の中国への輸出に関する衛生検疫手続の協議の促進に合意した。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

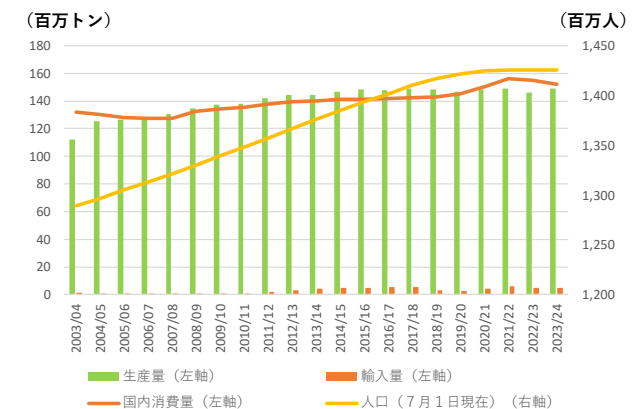
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	-	2.1	
消 費 量	156.4	155.0	152.0 (150.6)	-	▲ 1.9	
輸 出 量	2.1	1.8	2.0 (2.0)	-	11.1	
輸 入 量	6.0	4.6	5.0 (4.4)	-	8.7	
期末在庫量	113.0	106.8	106.8 (105.8)	-	0.0	
期末在庫率	71.3%	68.1%	69.4% (69.3%)	-	1.2	

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (29.45)	-	1.4
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.96)	-	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July, 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June, 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ生産量・消費量・輸入量と人口の推移（2017～2023年）



資料：USDA「PS&D」(2023.7.12)及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお2022年、2023年の人口は予測値。

< タイ > 雨季米の主要産地は十分な降雨も、その他産地の降雨は平年以下

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、水不足や生産コスト上昇等により、雨季米の収穫面積が前年度比 2.3%減少となり、前年度比 2.5%減の 19.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2021/22 年度比 1.5%増の 20.2 百万トンの見込み。

タイは5月下旬に雨季に入った。当初は例年よりも降雨が少なかったが、6月下旬に雨季米の主産地である北東部で十分な降雨があった。他方で、北東部以外の地域では、依然平年以下の降雨となっている。

IGCによると、エルニーニョ現象による降雨減少予測から、タイを含め 2023/24 年度の東南アジア全体のコメ生産が影響を受ける可能性があるとのこと。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.7）によると、2023 年は例年よりも雨季の開始が遅く、5～6月の降雨も少なかったため、雨季米の作付けは、作付面積予測の約 40%と、前年よりも進捗が遅れている。これを受け、収益性が高いキャッサバやサトウキビ等への作付転換や、耕作放棄も見られる。水不足や病害虫発生リスクが高いため、単収も減少が予想される。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 11.8%減の 7.5 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22 年度比 10.4%増の 8.5 百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023 年 1～5 月の輸出量は、前年同期比 26.4%増の 346.7 万トンとなった。検疫問題で7年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したイラクが 59.3 万トン（前年同期 41.5 万トン）、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の 0.9 万トンから大幅増の 46.5 万トンとなった。そのほか、南アフリカが 36.4 万トン（同 25.4 万トン）と増加している一方、米国は 29.8 万トン（同 34.5 万トン）と減少。

USDA「Rice Outlook」（2023.7.14）によれば、7月11日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、世界からの旺盛な需要により前月から 14 ドル上昇し、531 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインデ
ィカ米を栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.2	19.7 (20.7)	-	▲ 2.5
消 費 量	12.8	12.8	12.5 (12.9)	▲ 0.2	▲ 2.3
輸 出 量	7.7	8.5	7.5 (8.2)	-	▲ 11.8
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.3)	▲ 0.1	-
期末在庫量	3.4	2.4	2.1 (6.0)	▲ 0.1	▲ 10.5
期末在庫率	16.7%	11.2%	10.7% (28.7%)	▲ 0.2	▲ 0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.70	10.85	10.60 (10.85)	-	▲ 2.3
単収(もみt/ha)	2.81	2.82	2.82 (1.86)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July, 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June, 2023)（単収は精米t/ha）

表：タイの国別輸出量

(単位：万トン)			
国名	2022 年 1～5月	2023 年 1～5月	増減量
1 イラク	41.5	59.3	17.8
2 インドネシア	0.9	46.5	45.6
3 南アフリカ	25.4	36.4	10.9
4 米国	34.5	29.8	▲ 4.8
5 日本	12.1	16.7	4.6
6 中国	28.9	16.0	▲ 12.9
7 セネガル	8.2	14.4	6.2
8 カメルーン	7.0	11.8	4.7
9 バングラデシュ	0.0	11.5	11.5
10 モザンビーク	6.2	6.6	0.4
計	274.2	346.7	72.5 (前年比26.4%増)

資料：タイ米輸出業者協会（2023.7）

< ベトナム > 北部では冬春作の収穫が終了。南部では雨季米早稲の収穫開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積はわずかに減少も、単収は過去最高だった前年度の水準を維持する見込みから、前年度並みの 27.0 百万トンの見込み。肥料高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量は 2014/15 年度の史上最高の 28.2 百万トンを境に、緩やかな低下傾向にある。

2022/23 年度の生産量は、前月予測から変更はなく、2021/22 年度比 1.1%増の 27.0 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.7）によると、北部では冬春作（乾季米）の収穫が終了。単収は 6.44 もみトン/ヘクタールと、十分な灌漑用水と良好な天候から、昨年度から 3.5%増加する見込み。なお、夏秋作（雨季米）は作付けが続いており、発芽期にある。灌漑用水が十分なため、作柄は良好。南部のメコンデルタ地域では、夏秋作（雨季米）が幼穂形成期から穂ばらみ期にある。雨季米早稲は収穫が始まり、その他の雨季米の収穫も今月から開始される。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、豊富な供給量から、前月予測より 0.5 百万トン上方修正されたものの、2023 年にインドネシアへの備蓄向け輸出が終了すること等から、前年度比 4.0%減の 7.2 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量も、豊富な供給量から、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、7.5 百万トンの見込み。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～6 月の輸出量は 424.2 トンと、前年同期（349.3 万トン）に比べ 21.4%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（169.9 万トン）、中国（67.7 万トン）、インドネシア（49.3 万トン）、ガーナ（27.4 万トン）の順。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.7.12）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 7 月 11 日までの週の価格は、現在収穫されている夏秋作の供給がタイトなことや旺盛な国内外の需要から、前月の価格から 16 ドル/トン上昇して 519 ドル/トンと、2021 年 3 月以来の高値となった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.7	27.0	27.0 (28.0)	-	-
消 費 量	21.5	21.6	21.7 (22.0)	0.1	0.5
輸 出 量	7.1	7.5	7.2 (7.3)	0.5	▲ 4.0
輸 入 量	1.7	1.7	1.7 (1.1)	0.4	-
期末在庫量	2.5	2.1	1.9 (2.9)	0.1	▲ 9.7
期末在庫率	8.6%	7.1%	6.4% (9.8%)	0.3	▲ 0.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	7.17	7.16 (7.10)	-	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	6.01	6.03	6.03 (3.90)	-	-

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July, 2023)、
IGC 「Grain Market Report」(29 June, 2023)（単収は精米t/ha）

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」(2023.7.12)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

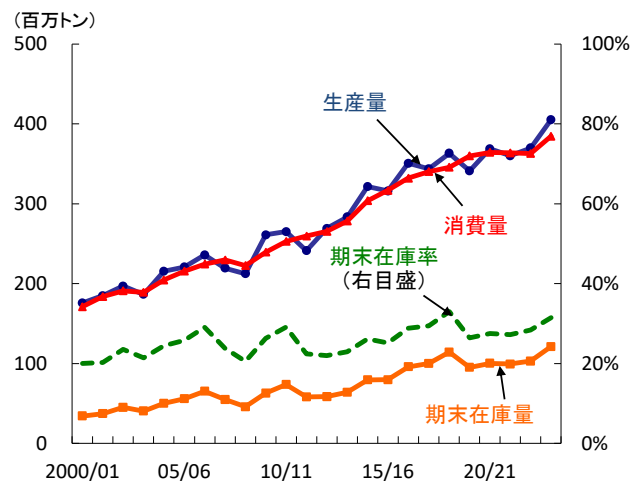
消費量 前年度比  前月比 

・エジプト、バングラディッシュ、パキスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比  前月比 

・カナダで上方修正されたものの、米国で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」(2023. 7. 12)をもとに農林水産省で作成

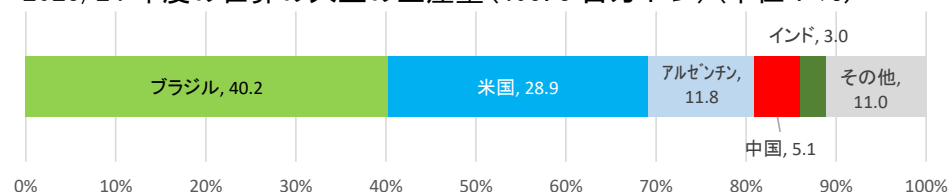
◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

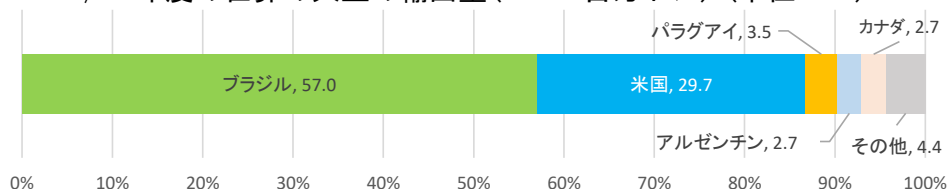
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	360.1	369.7	405.3	▲ 5.4	9.6
消費量	363.8	362.8	384.5	▲ 1.6	6.0
うち搾油用	314.4	311.2	330.3	▲ 1.7	6.1
輸出货量	153.9	168.9	169.3	▲ 3.1	0.2
輸入量	156.6	165.8	166.6	▲ 3.3	0.5
期末在庫量	99.1	102.9	121.0	▲ 2.4	17.6
期末在庫率	27.2%	28.4%	31.5%	▲ 0.5	3.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 July 2023)

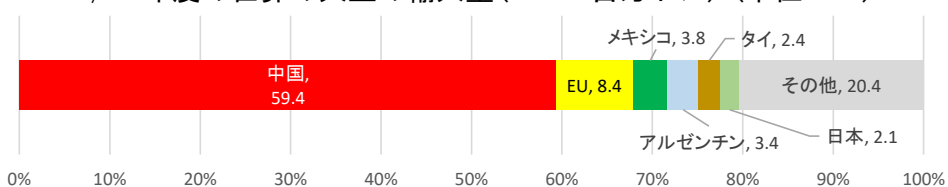
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (405.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出货量 (169.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (166.6 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 作付面積の減少により、生産量は 5.7 百万トン下方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、米国作付面積報告「Acreage」（2023.6.30）において作付面積が減少したことを受け、前月予測から 5.7 百万トン下方修正されたものの、単収の増加等により前年度より 0.6%増の 117.0 百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」（2023.7.17）によれば、7 月 17 日現在で主要 18 州における開花進捗率は 56%と、前年同時期（46%）、過去 5 年平均（51%）を上回っている。また、作柄評価の「良～やや良」の比率は 55%となり、6 月中旬の乾燥の影響で 7 月 2 日には 50%まで悪化したものの、7 月上旬の降雨を受け緩和された。しかし、前年同時期（61%）を下回っている。7 月から 8 月にかけての開花期から着莢期における天候に注意が必要。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 3.6%増の 66.0 百万トンで史上最高の見込み。ただし、前月予測から 0.3 百万トン下方修正された。背景としては、環境志向に伴い、バイオ燃料向けの搾油工場の新設による需要増が見込まれているものの、米国政府が 6 月 21 日に発表した最終的なバイオ燃料の混合義務が市場予測を下回ったことがあるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、生産量の下方修正による供給減により前月予測から 3.4 百万トン下方修正され前年度より 6.6%減の 50.4 百万トンの見込み。史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の実在庫量は、南米産との競争により輸出量が減少することから、前年度より 17.4%増の 8.2 百万トンとなる見込み。なお、作付面積調査を受け生産量が下方修正されたことにより、前月予測から 3.4 百万トン下方修正された。

USDA によれば、2023 年輸出量（2023 年 1 月 1 日～6 月 30 日）は 20.3 百万トンと、前年度同時期（20.9 百万トン）を下回っている。内訳は中国（11.0 百万トン）、メキシコ（2.1 百万トン）、ドイツ（1.5 百万トン）の順。

大豆－米国

（単位：百万トン）

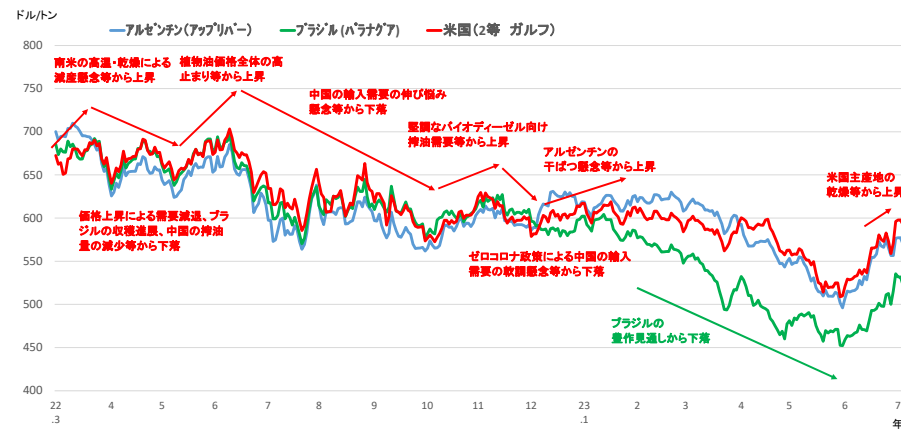
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 9 月～24年 8 月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	121.5	116.4	117.0	▲ 5.7	0.6
消 費 量	62.9	63.7	66.0	▲ 0.3	3.6
うち搾油用	60.0	60.4	62.6	▲ 0.3	3.6
輸 出 量	58.6	53.9	50.4	▲ 3.4	▲ 6.6
輸 入 量	0.4	0.7	0.5	-	▲ 20.6
期末在庫量	7.5	7.0	8.2	▲ 1.4	17.4
期末在庫率	6.1%	5.9%	7.0%	▲ 0.9	1.1

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.93	34.94	35.09	▲ 1.62	0.4
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.50	-	5.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 July 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が史上最大となる見通しから、前年度より 4.5%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.7.13）によれば、2022/23 年度の実生産量は、前年度より 23.1%増の 154.6 百万トンの見通し。最大生産州のマト・グロッソ州では、栽培技術の改善と良好な天候に恵まれ、増産となった。ただし、7 月見通しでは、干ばつの影響を受けた南部のリオ・グランデ・ド・スール州で単収が予想を下回ったことから、1.2 百万トン下方修正された。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用の大豆粕需要が増加することから、前年度より 5.1%増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2 年連続で生産量が史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 2.7%増の 96.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1 月～6 月の輸出量は 62.8 百万トンで、前年同期（53.0 百万トン）に比べ 18.5%増となっている。輸出先は、中国（43.5 百万トン）、アルゼンチン（3.0 百万トン）、スペイン（2.2 百万トン）の順。堅調な中国向け輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たすための輸出が大幅に増加した。

「OIL WORLD Monthly」（2023.6.30）によれば、7 月以降、ブラジルの輸出港におけるとうもろこし輸出が本格化する見込みであり、大豆輸出と競合する可能性がある。

大豆ーブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	130.5	156.0	163.0 (160.0)	-	4.5	
消 費 量	54.0	56.8	59.7 (59.6)	-	5.1	
うち搾油用	50.7	53.0	55.8 (56.3)	-	5.2	
輸 出 量	79.1	94.0	96.5 (98.0)	-	2.7	
輸 入 量	0.5	0.3	0.5 (0.3)	-	80.0	
期末在庫量	27.6	33.1	40.3 (10.7)	▲ 0.5	21.9	
期末在庫率	20.7%	21.9%	25.8% (6.8%)	▲ 0.3	3.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.60	43.90	45.60 (44.75)	-	3.9	
単収(t/ha)	3.14	3.55	3.57 (3.58)	-	0.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。
2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2023.7.13）

＜ アルゼンチン ＞ 2022/23 年度の輸入量は、減産により史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度から回復する見通しから 92.0%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.6.29）によれば、収穫が終了した 2022/23 年度の生産量は、21.0 百万トン（過去 5 年平均（45.0 百万トン）より 53%減）と低水準となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、増産に伴い搾油量が回復することから前年度比 18.5%増の 43.0 百万トンの見込み。なお、2023/24 年度の搾油用需要が前月予想よりさらに回復する見通しから前月予測から 0.3 百万トン上方修正された。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要に乏しく、前年度より 34.5%減の 5.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、国内生産が減少したことを受け、搾油用需要を満たすためにブラジル産及びパラグアイ産の輸入が急増したため、8.7 百万トンで史上最高の見込み。アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 4・5 月の輸入量は 261.6 万トンで、前年同時期（93.8 万トン）の 2.8 倍。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 21.1%増の 4.6 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形の発行、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を発表した。また、外貨獲得のため、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間の 45 日間を超えない範囲で、大豆優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）を適用した。

現地情報によると、外貨獲得のため 4 回目の大豆優遇為替レートの導入を政府が検討しているとの噂が流れているが、6 月 28 日、農務長官は「今のところはない」と述べ、即座の導入を否定した。

大豆ーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	43.9	25.0	48.0	(44.0)	-	92.0
消 費 量	46.0	36.3	43.0	(42.8)	0.3	18.5
うち搾油用	38.8	30.0	36.3	(39.0)	0.3	20.8
輸 出 量	2.9	3.8	4.6	(5.1)	-	21.1
輸 入 量	3.8	8.7	5.7	(5.5)	-	▲ 34.5
期末在庫量	23.9	17.6	23.7	(3.6)	▲ 0.3	35.0
期末在庫率	48.9%	43.8%	49.8%	(7.6%)	▲ 0.8	6.0
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	15.00	16.40	(16.10)	-	9.3
単収(t/ha)	2.76	1.67	2.93	(2.73)	-	75.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2023)
IGC「Grain Market Report」(29 June 2023)

表：アルゼンチンの大豆輸入量、輸入先国
（4 月以降、ブラジル産及びパラグアイ産の
輸入が急増）

2022/23年度 (2023年 4 月～5 月)		
国名	輸入量 (万t)	シェア (%)
ブラジル	123.5	47.2
パラグアイ	122.9	47.0
ボリビア	15.2	5.8
計	261.6	100.0

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）のデータ
をもとに農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度より 1.1%増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

2 月 13 日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央 1 号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

なお、6 月末現在、主産地の東北地区の黒竜江省等では第三本葉期から開花期を迎えている。当初降雨は少なかったが、6 月から 7 月にかけての降雨と 6 月中旬の生育に適した気温により、概ね平年と比べ順調に生育しているとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内の大豆粕需要と食料需要が増加することにより、前年度より 4.7%増の 118.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前年度の在庫が上方修正され国内需要の一部を満たすとの見通しから、前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、前年並みの 99.0 百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023 年 1 月から 5 月までの間の輸入量は、前年同時期より 11.2%増の 4,230.6 万トン。内訳は、ブラジル（2014.8 万トン）、米国（1,918.3 万トン）、アルゼンチン（142.9 万トン）の順。5 月に新穀が収穫された安価なブラジル産の輸入量が急増した（前年同時期比 40.3%増）。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 5 月号」によれば、5 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（5,260 元/トン）から下落し、5,040 元/トンとなった。一方、5 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（5,920 元/トン）から下落し、5,720 元/トンとなった。国家備蓄の売却と輸入大豆の入荷により、下落傾向で推移するとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からわずかに下方修正されたものの、前年度より 3.8%増の 38.2 百万トンで史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測からわずかに下方修正され、前年度から 0.3 ポイント減少し、32.3%となる見込み。

大豆－中国

(単位：百万トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	16.4	20.3	20.5	(21.5)	-	1.1
消 費 量	108.4	112.7	118.0	(117.7)	-	4.7
うち搾油用	87.9	91.0	95.0	(97.8)	-	4.4
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	▲ 23.1
輸 入 量	91.6	99.0	99.0	(98.9)	▲ 1.0	-
期末在庫量	30.3	36.8	38.2	(33.1)	▲ 0.0	3.8
期末在庫率	27.9%	32.6%	32.3%	(28.1%)	▲ 0.0	▲ 0.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45	(10.44)	-	2.1
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96	(2.06)	-	▲ 1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 July 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (29 June 2023)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年 5 月			2023年 1 月～2023年 5 月			2022年 1 月～2022年 5 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	1093.8	91.0	ブラジル	2014.8	47.6	ブラジル	2046.6	53.8
米国	94.5	7.9	米国	1918.3	45.3	米国	1676.9	44.1
ロシア	9.0	0.8	アルゼンチン	142.9	3.4	ロシア	25.2	0.7
ベナン	1.9	0.2	カナダ	92.2	2.2	カナダ	23.7	0.6
エチオピア	1.7	0.1	ロシア	48.5	1.1	ベナン	13.8	0.4
タンザニア	0.4	0.0	エチオピア	5.1	0.1	アルゼンチン	12.3	0.3
その他	0.7	0.0	その他	8.8	0.1	その他	4.7	0.1
計	1202.0	100	計	4230.6	100	計	3803.2	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 作付面積の増加により、生産量は2.0百万トン上方修正

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.7.21）によれば、2023/24年度の実産量は、作付面積調査を受けた収穫面積増により前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度から6.1%増の6.9百万トンの見込み。前年度からの増加要因は、単収が3.01トン/ヘクタールと高水準の単収だった前年度より低下するものの、収穫面積が2.28百万ヘクタールと前年度より増加することによる。

AAFCによれば、主産地のカナダ東部では、一部で高温の影響を受けて生育状況にばらつきがあり、今後の生育期に降雨が必要とされている。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアがある。オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

カナダ統計局「Principal field crop areas, June 2023」（2023.6.28）によれば、作付面積は前年度より6.8%増の2.28百万ヘクタールで、過去5年平均並みの見込み。オンタリオ州では前年より5.4%減の1.17百万ヘクタールである。一方、マニトバ州では、前年度の史上最高の単収を受け農家が作付面積を増やしたことから、40.6%増の0.65百万ヘクタールの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からわずかに上方修正され、前年度から1.9%増の2.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、増産による輸出余力の増大により前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度より4.6%増の4.6百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23年度（2022年8月～2023年7月）のうち、2022年8月～2023年5月の輸出量は310.8万トンで、前年度同時期（280.9万トン）を上回っている。国別では、中国向け（128.8万トン）が41%を占め、続いてイラン（49.0万トン）、アルジェリア（36.5万トン）、イタリア（25.1万トン）の順。2023年5月の輸出量は4.3万トンで、全量がイラン向けである。

AAFCによれば、2023/24年度の期末在庫量は、面積増による増産見通しから期末在庫が増加し、前月予測から5万トン上方修正され、前年度から14.3%増の0.4百万トンの見込み。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	6.7 (6.9)	0.2	2.4
消 費 量	2.3	2.6	2.7 (2.5)	0.0	1.9
うち搾油用	1.8	1.9	1.9 (1.9)	▲ 0.1	2.7
輸 出 量	4.3	4.4	4.6 (4.8)	0.2	4.6
輸 入 量	0.5	0.6	0.5 (0.5)	－	▲ 9.1
期末在庫量	0.4	0.6	0.6 (0.4)	0.1	－
期末在庫率	6.5%	8.2%	7.9% (5.5%)	1.0	▲ 0.3

(参考)

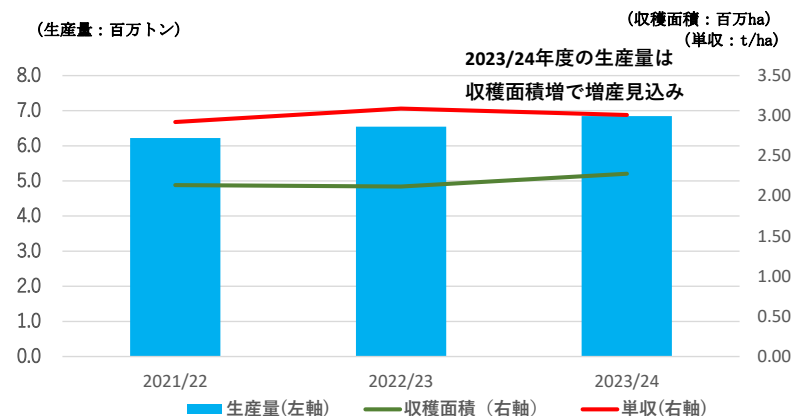
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.25 (2.28)	0.05	6.1
単収(t/ha)	2.99	3.09	2.98 (3.01)	0.03	▲ 3.6

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 July 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 July 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.7.21)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2023/24年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

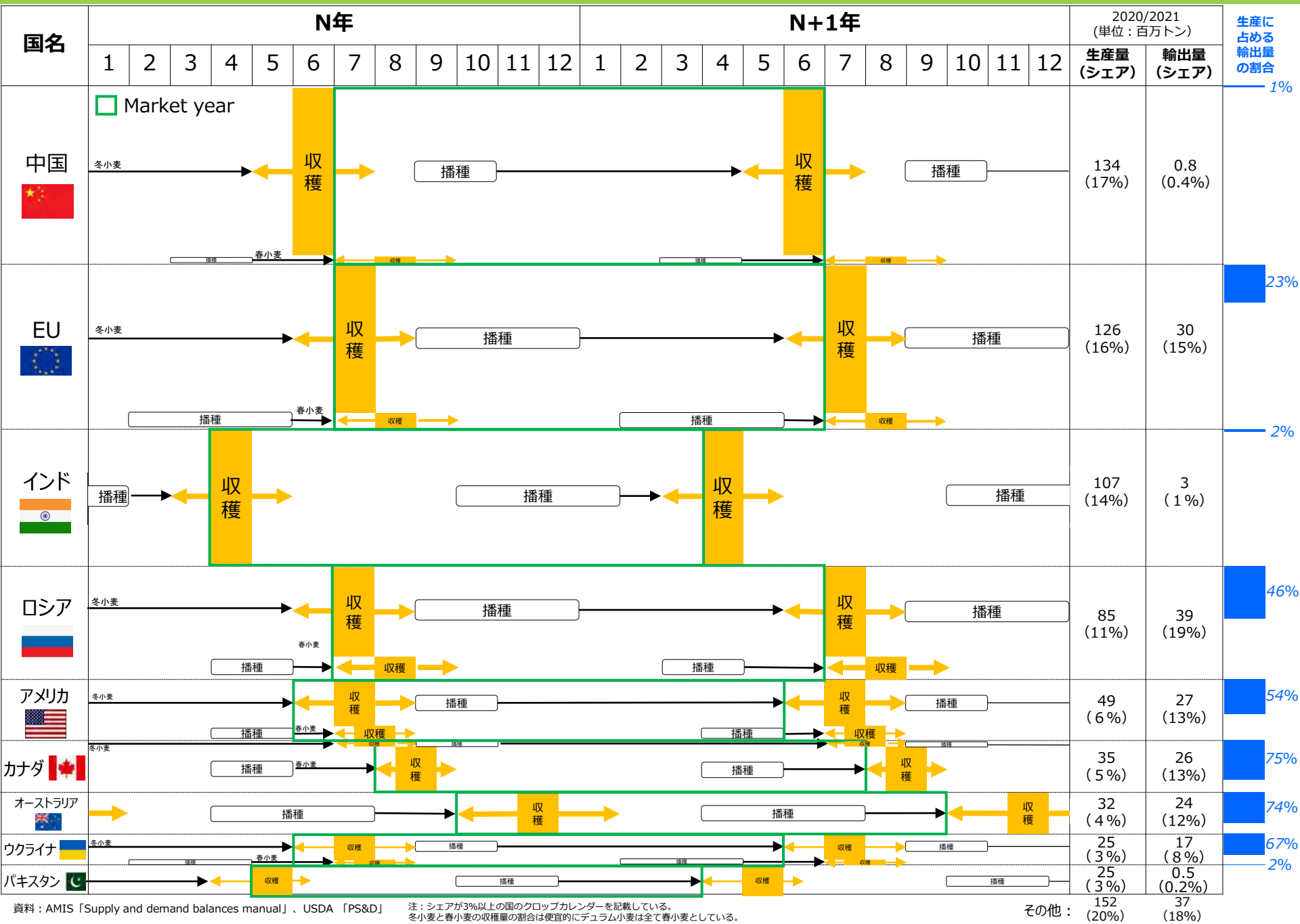
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

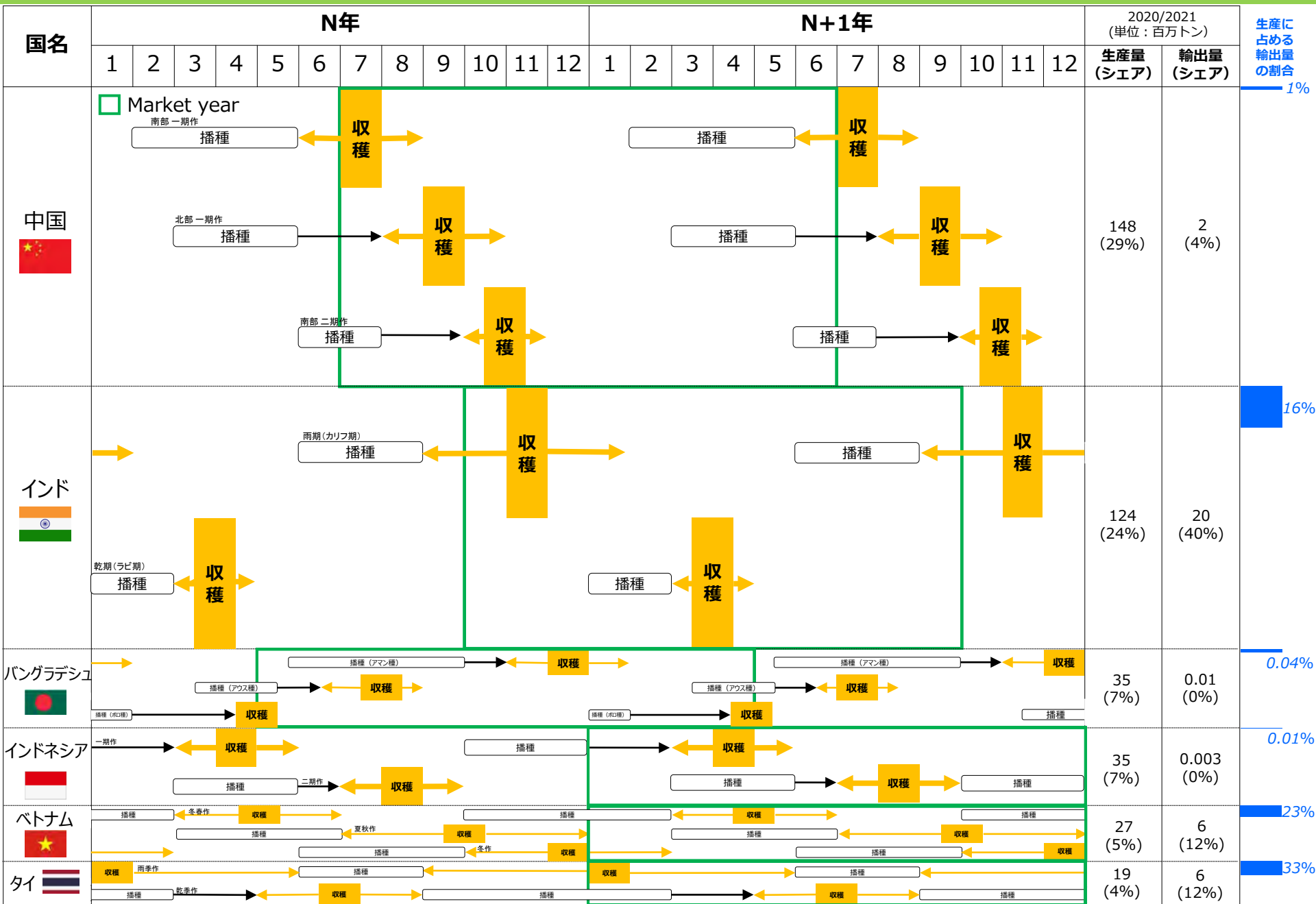
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料 : AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」 注 : シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他 : 121 (24%) 16 (32%)

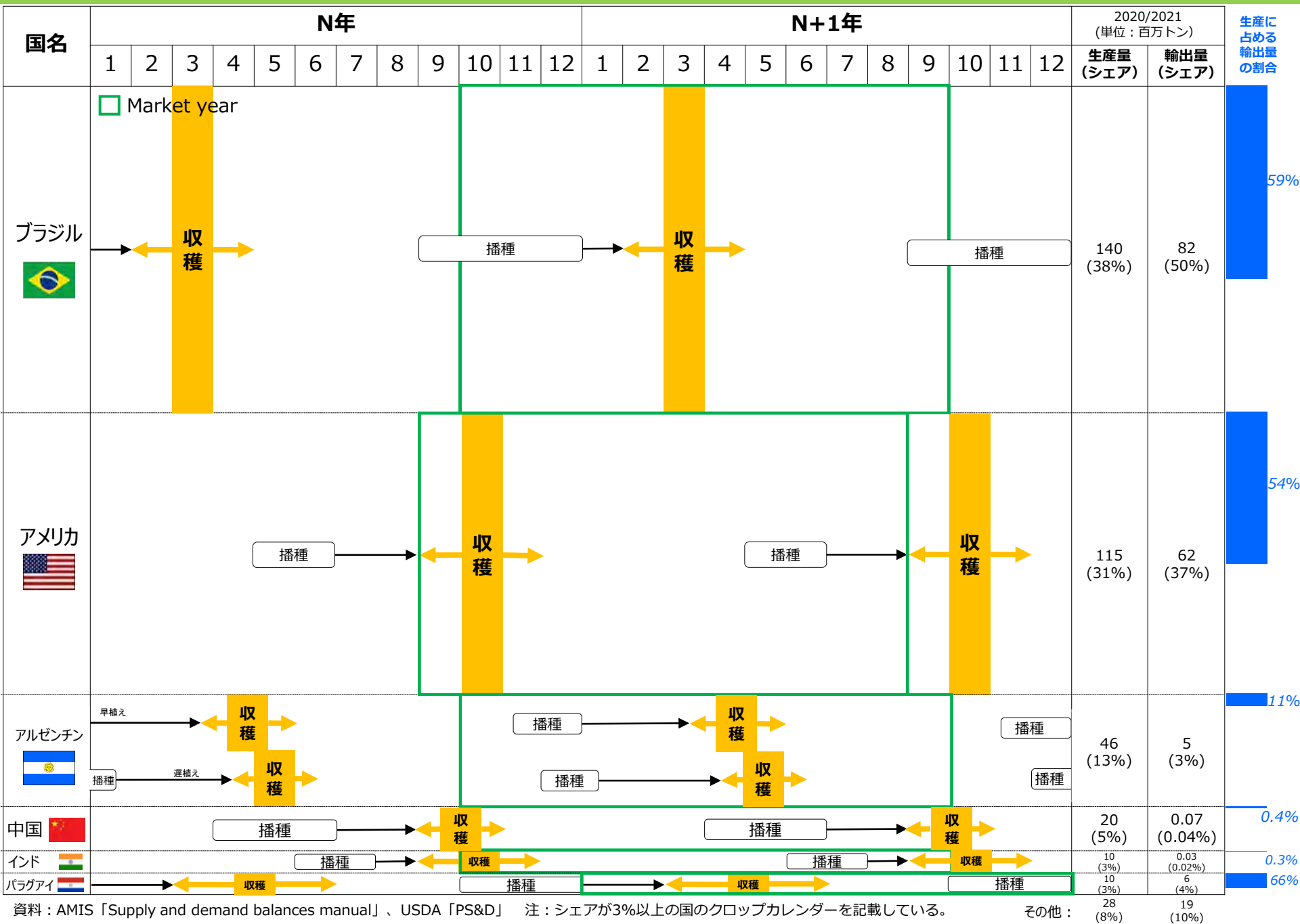
主要生産国のクロップカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2020/2021 (単位：百万トン)		生産に 占める 輸出品 割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出品 (シェア)	
アメリカ	Market year																								358 (32%)	70 (38%)	19%
中国																									261 (23%)	0.004 (0%)	0.002%
ブラジル																									87 (8%)	20 (12%)	24%
EU																									67 (6%)	4 (2%)	6%
アルゼンチン																									52 (5%)	40 (22%)	79%
インド																									31 (3%)	4 (2%)	11%
ウクライナ																									30 (3%)	23 (13.1%)	79%
その他																									242 (19)	21 (11%)	

主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

資料：USDA「Crop Calendars」、「PS&D」

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 8 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

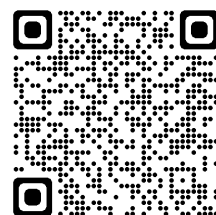
- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特
に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）



ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html